肝っ玉お嬢様奮闘記

相神 透

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

肝っ玉お嬢様奮闘記

【Ｎコード】

Ｎ９４３８Ｘ

【作者名】

相神　透

【あらすじ】

ベテラン看護婦が、病死して異世界に転生した。見知らぬ世界での新しい人生で、彼女は治癒師になろうと奮闘する。

★残酷描写の警告はつけていますが、戦闘というより治療場面で必要かもということです。主人公は戦いに興味がないので、戦闘描写は少なめです。恋愛は、まだ遠そうなのでタグはつけないことにします。

～転生～

……もう、死ぬ覚悟は出来ていた。長い間、病院のベッドに縛り付けられているのだ。病室の窓から見える季節はすでに一巡し、二回目の秋を迎えようとしている。何か月も前に、自分の病気が不治のものであることも、進行し続けていることも、説明を受けている。だからもう、死ぬことは怖くはない。いや、怖くないと思っていた。

自分だけのことならば充分生きたといえるかもしれない。平均寿命にはまだまだあるとはいえ、５０年も生き、看護師として働き、そして医師の夫と結婚し、二人のこどもにも恵まれた。夫と二人で多くの命を救ったし、多くの命を見送った。充実した人生だったと思う。ただ、この子たちを残していくことだけが心残りだけれども、二人とも、もう成人しているのだ、私が子離れできていないだけなのかもしれない。

ただ、それでもまだ生きたい、生き続けたい。夫や子どもと一緒の時間を過ごしたい。笑い合いたい。抱き合いたい。そう願ってしまう。願っても叶わないし、願うだけつらくなるだけなのに。

ああ、そろそろ終わりだ。体から力が抜けていくのがわかる。呼びかける家族の声が遠くなる。ああ、最後くらいは笑いかけてほしい。笑顔を見せほしい。私も笑顔で、逝くから、笑顔を覚えておいてほしいから。さようなら子供たち、さようならあなた、さようなら……

「ご臨終です」

医師のその声は、私には届かなかった。

◆　◆

目が、覚めた。覚めるはずがないのに。ゆっくり開いた眼には白く柔らかな光が差し込んでくる。生き、てる、のか。まだ生きられるのだろうか。また、笑いあえるのだろうか。狂おしい希望が胸に湧き、感情がほとばしる。衝動的に声を張り上げた。

「おぎゃぁ、おぎゃぁ、ぎゃあああああ」

私の喉からでたのは赤ん坊の泣き声。

……そのあと、私が事態を把握し、納得するまでにはしばらくの時間が必要だった。

1.

どうやら、私は生まれ変わったらしい。まだきちんとは開けることもできない目を、一生懸命に開いて見えてくる世界の端に、たまに映り込む自分の手は、どう見ても赤ん坊の小さな手だ。細くて、小さな指がピンク色の丸々とした手のひらから伸びている。それは自分の手のはずなのだが、小さくてかわいらしくて、息子や娘の子供のころを思い出す。

思わず笑みが浮かぶ。笑みが浮かぶだけではなく、キャッキャッと声が出て、手足をバタバタして喜びを全身で表してしまうのは、赤ん坊の本能的な反応なのだろうか、ちょっと制御できない。

「あーらマーヤちゃん、ご機嫌ねぇ、どうしましたかぁ」

私の名前はマーヤと言うらしい。愛称かもしれないが。その名前で優しく話しかけてくれるのは、おそらく今世の母なのだろう。やわらかい声が耳に優しい。まだ焦点が合わない目では、母のはっきりとした容姿はわからないのだが、どうやらコーカソイドのように見える。

キリスト教圏でも転生ってあるのかな、などと思った理由は、言葉だ。残念ながら日本語ではなかったのだが、まったく知らない言語でもない。ところどころ知らない単語が出てくるのだが、私の知っている英語でかなりの話が理解できたのだ。完全な英語ではないのだが、英語の変形、のようなものにおもえた。

――英語圏の国に生まれ変わったのかな。

そんなことを思っている。

生まれて数か月で、目の焦点すら合わない子供の脳のどこに、英語の知識を含めた前世の記憶があるかなどは、あまり考えないことにしよう。

「マーヤちゃんどうしたの、今度は難しい顔してしてるわねー。おしっこかな？」

少し考え込んでると、母が私を抱き上げて、顔を覗き込んできた。そうすると不思議なもので、自然に心が浮き立ち、顔には笑みが浮かぶ。私は喜声を上げながら、覗き込んでる母に手を伸ばし、届いた母の肩をつかんで引き寄せようとしたりしていた。

前世で５０年生き、今も前世と同じ思考力を持っていると思うのだが、感情や反射や本能なんかは、どうも今世の年齢に引きずられるようだ。そうじゃなければ、飢えてしまったかもしれないから、助かる。精神年齢５０のままだと、母のおっぱい求めて泣くのは死ぬほど恥ずかしかったことだろう。しかもその母は前世に残した娘とそう変わらない年齢に見えるのだし。

「よーしよし、マーヤちゃんいい子ねえ」

母は上機嫌で私をあやしてくれる。時折顔を覗き込みながら、全身で揺らしてくれるのだ。すっかりと守られている実感があり、大変気持ちがいい。

母の腕の中で揺れていると、ゆっくりと眠気がやってくる。私は眠気に逆らうことはせず、母の胸の鼓動を心地よく聞きながら意識を手放した。

――大きくなったら日本に行って、自分の子供たちに会うのもいいかも。

なんてことを夢想していた気がする。

◆　◆

2歳の誕生日を迎えるころにはもう、日本に帰ったり、あわよくば、娘たちに会おうなんて希望は捨ててしまった。この世界の世界地図に、日本がなかったのだ。なかったのは日本だけではない。私が見たのは、見たこともない形の大陸のみが描かれていて、赤道も極地も描かれていない、何とも不完全な地図だった。

話してる言葉が英語に似てるのだから、地球の未来なのかもという期待も、その地図で吹っ飛んだ。明らかに地球じゃない、それに地図の出来を考えると、明らかに文明レベルが低いのだ。

そして何より、この世界には魔法があった。

私の父は魔法の才能を持っていて、その力で宮廷魔術師の地位についていた。……どうやらこの国は王政らしい。父は普段あまり魔法を濫用しない人の様なのだが、たまに私を魔法で宙に浮かべてあやしてくれる。下に何もない空間にふわふわ浮かんでいるというのは、最初は生きた心地がしなかったものだ。せめてゆりかごに乗せてほしかった。

それはともかく、その時にはっきり悟ったのだ。どうやら、ファンタジーな世界に紛れ込んだようだ、と。

また、たまに父は、王宮で王族がたに各国の話をする吟遊詩人な

どを、家に連れて帰ってきて泊めてやることがあった。詩人たちの語る世界の話は、とんだおとぎ話だった。竜が空を舞い、妖精や鬼が森や山には棲んでいるらしい。そして、魔法で強化され、魔獣や魔物になった生き物たちを狩り、人間の版図を守ったり、皮や爪を採取して町で売るハンターと呼ばれる人々もいるらしい。

前世で息子がやっていた、ロールプレイングゲームってのを思い出した。５０年間の前世の経験は、この生では役に立ってくれるんだろうか……

2.

「おとうたま、あたくち、くくがほちいでちゅ」

あ、噛んだ。ただしくは、お父様、私靴が欲しいです、です。まだ上手く舌が回らず、どうしても舌足らずな話し方になってしまう。それでも、2歳児としては破格なほどにしっかりしたしゃべりかただとは思う。わたしは喋り方を偽ってまで肉体年齢と合わせようとは思っていない。

それはともかく、前世と同じ様にこちらの世界にも誕生日を祝う風習があるようだ。私の2歳の誕生日の今日、宮廷魔術師である父も、なんとまる一日、休暇を取って祝ってくれている。そんなことで良いのだろうかと、ちょっと心配になる。そして、お祝いにプレゼントをくれるという。

「マーヤは、誕生日プレゼントに、なにがほしいかな？」

我が家のリビングのソファーに、ちょこんと座った私の前で、栗色の髪に、緑色の瞳の童顔の青年がしゃがみこみ、私に視線を合わせるようにして尋ねてくる。子煩悩な我が父、宮廷魔術師にして準男爵の、カイル＝アストリウスだ。準男爵というのは、２０代半ばで宮廷魔術師に召された時に賜った、一代限りの爵位だそうだ。

あ、歳といえば、この世界での一年は３５０日と、年によって何日か日数が足されて３５０～３６０日になる。１日の長さは、測りようがなくてわからないのだが、なんと２４時間、６０分、６０秒と、数え方が一緒だった。１秒が感覚的に変わらないので、大きな差はないのかもしれない。言葉が英語の変形のようなものであったり、私の前世の地球とこの世界は、絶対に何らかの関係があるのだ

ろう。

話を元に戻す。誕生日プレゼントに何かほしいかを、なぜか誕生日の当日に聞かれた私は、家の外に履いて出るための靴をお願いした。私の住むあたりの文化は西洋の中世に似たものを持っているので、もちろん家の中でも靴を履くのが普通だ。現に私も靴を履いて、家の中は歩き回っている。しかし、その靴は、絨毯の敷いてある家の中で歩く分には問題ないが、地面の上を歩くとすると、やわらかすぎて心もとないものなのだ。どうも過保護な両親が外に出すのを渋っているようだ。

「マーヤちゃん、すごいわぁ賢いわぁ、ちゃんとお願いできるのね。なんてかわいいんでしょう」

親ばか発言の主は母である。これはお願いした内容に対する評価じゃなく、二歳の誕生日を迎える娘が、何がほしいかを自分で考えて、言葉にしたことが嬉しかったようだ。父の前にすわっていた私を、横から抱き上げて、頬ずりをしてくれる。くすぐったくて、くすくす笑うと、それがまた嬉しかったらしく、力を込めて、しかしふんわりと抱きしめてくれる。やわらかく、暖かくて気持ちがいい。その、幸せな感触を堪能してると、母が耳元で言う。

「でもね、マーヤちゃん、まだ一人でお外に行くのは早いと思うの。外の地面は堅いから、転ぶとすごく痛いのよ。もうちょっと大きくなってからにしましょうね。」

親ばかでも、外の散歩は簡単には許してくれないようだ。これは今回はあきらめることにしよう。しかし外に履いていける靴がほしいことは、強く言っておいたほうがいいだろう。ちょっと悲しげに言ってみる。

「でも、おしょとで歩きたいのでちゅ。おかあたまと一緒に歩きたいでしゅ」

しまった、やりすぎたか。2歳児のやる交渉事ではないような気がしてきた。両親におかしな子だと不安を抱いてほしいわけではない。

しかしそれは杞憂だったようだ。母は一瞬きょとんとして、そのあと目を潤ませて、感激したように抱きしめる腕に力をこめてきた。少し苦しい。

「あなた、庭にやわらかい芝生をはりましょう。明日にでも。ルーイ商会の方も呼んでもらえますか」

どうやら「一緒に歩きたい」に反応して、2歳の子供らしくない交渉方法は、母の気には止まらなかったようだ。母の眼がキラキラと光って見える。ちなみにルーイ商会というのは我が家に出入りの商会の一つで服飾系が強いようだ。芝生は、転倒時の怪我防止なのだろう。少し過保護な気がするが、そこは譲歩するところなのだろう。芝生の養生にかかる値段を2歳児が気にするのは不自然だろうし。ここでは、すこし身じろぎをして、腕の力を緩めてもらうだけにした。

「じゃぁ、お母さんからのプレゼントは、芝生と靴に決まりだね。じゃあ次はお父さんのプレゼントだ。実はもう、どんなプレゼントにするか決めてあるんだ。気に入ってくれるとうれしいな」

おや、両親からそれぞれもらえるとは。そんなに子供を甘やかしてどうするんだ。

「あたくちはどちかひとちゅで、いいでしゅよ。」

とっさに言ってしまった。私はどっちか一つでいいですよ、と言おうとしていることを察してほしい。しかしこれも子供らしくない発言だったか。親からの誕生日プレゼントに遠慮をする2歳児というのは如何なものだろうか。私が2歳児は似つかわしくない反省をしていると、父が答えていう。

「でも、もう用意してしまってるんだ。お父さんとお母さんで決めてたんだよ、マーヤがほしがるものと、マーヤにあげたいものを一つずつあげようって。それに、このプレゼントは私の父や母、おまえのおじい様やおばあ様にも手伝ってもらっているんだ、あのひとたちの気持ちと一緒に受け取って欲しいな」

そう言われてしまうと、受け取らないわけには行かない。この場合の祖父母というのは、辺境に住む父方の祖父母のことだろう。魔物が出るといわれる森のそばにすんで、そこでしか取れないような材料を使った薬などをつくっているらしい。父が準男爵ということは、つまり出身は平民、その実辺境の民であり、宮廷勤めには爵位くらいは必要だろうということで、国王直々に頂いたらしい。祖父母は王都の華やかな暮らしを嫌ってか、辺境から離れようとしないらしい。その、遠方に住む祖父母が、孫に誕生日プレゼントを送りたいというのであれば、これはちょっと断れない。

しかし、父のこの説得の仕方は、誕生日を迎えたばかりの二歳児相手にするものではないだろうと思う。頭ごなしに決めつけるということをしないのはありがたいのだが。

父も母も、私が子供らしくないということには、もう気づいているということなのだろう。そのことを残念に思っていなければいい

のだが。それに、だとすれば少なくとも母相手には子供の手管は通じないかも。いや、先ほどの反応見る限りは大丈夫か。

……そんな取り留めもない思考にとらわれている間に、話が進んでしまっていた。

「サーヤ、私はあれをとってくるよ。」

父は母にそう告げて、リビングを出て行った。サーヤというのは母の名だ。誕生日プレゼントとやらは書斎にでも置いてあるのだろうか。あんまり大げさなものでなければいいのだが。

2．（後書き）

ちょこまかと誤字など修正しています。
感想を頂けるとおありがたいです。

（１０／２７）　あれこれ修正。
投稿する前に読み直さないと．．．

3.

「おかあたま、おとうたまの用意ちているものって、どんなのでちゅか」

父がリビングから出て行った後、私は好奇心が抑えられなくなった。私を抱きかかえたままの母に、プレゼントの内容を尋ねてしまう。大人がやればマナー違反で眉をひそめられる行為だ。

最近、感情だけではなく、思考や行動も少しずつ子供じみてきている気がする。退化なのか、順応なのか、気になるところだ。

「マーヤちゃん駄目よ、そんなの先に聞いたら楽しみが減っちゃうわ。お父さんもお母さんも、あなたのびっくりする顔が見たいんだから」

にこにこ笑いながら、優しい声でダメ出しされた。やっぱりマナー違反なのだが、2歳の子供のちょっとしたマナー違反を深刻に叱る親はあまりいない。とはいえ、自省していたこともあり、反射的に謝罪の言葉が出て来る。

「ごめんなしゃい…」

少し沈んだ声になった。それを聞いた母は、またもにこにこと笑って頬ずりをしてくれる。まあなんて可愛いんでしょう、なんてつぶやいている。

などと、母娘のコミュニケーションを深めていると、父が帰ってきた。大事そうに両手で持っているのは、木製の箱のようなもの。

大きさは高校生のお弁当箱くらい、こちらの世界なら文箱と同じくらいのようだ。

父はリビングのテーブルの上を片付けて、箱と一緒に持ってきたらしい大きな紙を広げていきながら、説明してくれた。

「マーヤへのプレゼントは魔法の守護者だよ。まずはマーヤの魔法の適正を観ようね」

そう言えばこの世界には魔法が存在するんだった。日頃から片鱗は目にしているが、普段の生活にすっかり馴染んでいて忘れそうになる。灯りや水洗トイレは、魔法であっても利便性は変わらない。

「しゅごしぁ？てきせえ？」

「マーヤの得意な魔法を調べるんだ。そしてその魔法を助けてくれる精霊を、守護者として精霊の世界から喚ぶんだよ」

「あたくちのまほう？」

宮廷魔術師なんてものをやってる父をもつのだから、魔法を使えても不思議はないのかも知れないが、自分で魔法を使うことは考えもしなかった。

「お父さんも使えるし、お母さんもお花とか咲かせるの、上手なのよ。お母さんの守護者はこの子たち。」

母がそう言うと、そのまわりにたくさんのひらひらしたものが、とび回り始めた。色とりどりで何だか幻想的である。魔法で喚ばれた精霊だから幻想的で当たり前なのだが。

それにしても、いままで母の守護者に気づかないはずだ。どうみても蝶なのだ。母の周りを飛んでいるのを見ていたとしても、それが魔法だとか思わなかっただろう。

「お母さんは植物を育てる魔法が得意なんだよ。お母さんの守護者は受粉を助けてくれるんだ」

父が、補足するように言うが、2歳児への説明としては不適切ではないだろうか。

それはともかく、気になるのは父の魔力だ。期待を込めてじっとみる。

すると父は言いづらそうに口を開く。

「あー、お父さんの魔法は家の中とか町の中で使うのには、ちょっと向いてないんだ」

剣呑なことを言う。宮廷魔術師というくらいだから、なにか凄いことが出来るのかもしれない。とはいえ、今はそれは後で良い。もっとも身近にいる母が操った魔法――実際は自分の守護精霊を呼んだだけなのだが――にすっかり心を奪われていて、自分がどんな魔法を持ってるのか、というのにわくわくしている。

「おとうたま、あたくちのまほーは？」

「あ、そうだな。」

父は、自分の守護者を見せろとせがまれ無かったのに、ほっとしたようだった。

「守護者を喚ぶのは、魔法の適正を調べる効率良いやり方なんだ、マーヤのおじいちゃんと僕とで発見したんだよ。この魔法陣は王宮の書庫で見つけた、人のことが好きな精霊を喚ぶ魔法陣で、喚んだ聖霊は、この精霊石の力で、マーヤの近くにいられるようにするんだ」

どうやら、我が一族のオリジナルの魔法のようだ。父は説明しながら先ほど広げた紙の真ん中に箱から取り出した、青白く透き通った石のようなものをおいた。これが精霊石なのだろう。

「おじいさんが、辺境の森で見つけたんだよ。本当はマーヤにはまだ早いと思うんだけど、折角大きくて質のいい精霊石が手に入ったからって誕生日プレゼントに送ってくれたんだよ」

「マーヤちゃん、今日だめでも気にしちゃ駄目よ？何回でも試せるんですからね。」

始めるまえから父母が牽制しているが、2歳の誕生日の娘は、その気遣いを普通は理解できないのではないだろうか。

ともかく、魔法陣を眺めて見る。

……ラテン語？

前世の最期の半年、退屈をまぎらわすためと、なにかなんのやくにもたたないことをしてやろうという、意地だけで、勉強した言葉が魔法陣にかかれていた。

「ラブレター？」

書かれている内容におどろいて、思わず呟く。

「マーヤ、何で判るんだい、もうだれも読めない古代文明の言葉なのに…」

「え、なんとなくしょんなかんじ…」

父の追及に上手くかわせなくて、焦ってどもる。

「なんとなく、か。凄いな。素質なのかも。これは、精霊に愛を訴えかけて、受け入れてくれる精霊をよぶものだよ」

…私が読む限り、もっと永続的な、最後通告のようなプロポーズなのだが。

「じゃあ始めるよ、精霊と一緒にいたいって願うんだ。」

…もう始めるの、心の準備がまだなんですが！？

魔法陣に並ぶ愛の言葉が気恥ずかしくて、私は同じ位に強い思い、生涯の友誼を念じた。

部屋のなかに、なにやら濃密な気配が満ちる。息苦しく感じるほどのそれは、しかしつかの間で、消え去り、魔法陣と精霊石だけが残されている。

「失敗？でも、マーヤには治癒の力をはっきり感じたぞ、それにあの、濃い気配…」

どうやら、魔法の種類は判ったが、守護者は喚べなかった、というところか。にしても前世で看護師だった私の魔法が、治癒だとい

うのは運命の皮肉か、なにかの差配なのか。

突然、精霊石が輝きだした。部屋が白くなる程の明るさなのに、不思議に目に優しい光だ。

その光が消えた後に、精霊石の隣には小さな人影が立っていた。

「妖精…？」

まるで、地球の御伽噺に出て来るような、妖精だった。掌に乗りそうな小さな体に、体と同じくらいの大きさの羽根、カゲロウの物と、そっくりだ。

ただし、その妖精は看護師の白衣いわゆるナース服を着ていたのだが。

4．（スリヤ）

それは、奇妙で独善的で、押しつけがましい詠だった。

◆　◆

あなたは今どこにいるのですか
わたしは今ここにいます

あなたが遥か宇宙の彼方にいても
あなたが深き深海の底にいても
あなたをもとめるこの声を届けましょう

知ってください、あなたを愛する者のことを
知ってください、あなたが愛する者のことを
あなたを喚ぶものがここにいます。

愛を鎖にしてあなたをしばり、
鎖は愛となって私をからめ捕るでしょう
鎖が二人をつなぎ合わせるでしょう

滅びが分かつ時まで

◆　◆

スリヤは退屈していた。精霊界に生を受けて１００年が経つが、ここ何十年と何も面白いことが無い。地上を眺めて暮らすのにも飽きていた。

もしこのまま、何事もなく時が過ぎていれば、彼女自身が悪鬼と化して、地上に騒乱を起こしていたかもしれない。このまま、何も、面白いことがなかったなら。ふいに、奇妙な喚び声が聞こえてくる。魔力の波動に乗ってくるその声は、うっとおしい、愛情の押しつけのような言葉なのに、感じる魔力は妙に純粋なのだ。

最初、スリヤはちょっと興味を持っただけだった。これは人間が精霊を呼ぶ声だ、契約を求める声だとわかったから。スリヤは契約する気などない。人間との契約はたいてい詰まらない。ちょっと見てみようと思ったのだ。この声の元はどんな奴なんだろうと。そしてどんな精霊が契約するんだろうかと。

声の元は人間の王都の小さな屋敷にあった。そこに近づいていくと、仲間の精霊の気配が驚くほど濃密だ。あの声にひかれてやってきたものが非常に大勢いるのだろう。ただ、スリヤ以外はみな、まだ彼女に比べれば生まれたばかりといっていい連中で、言葉を解するレベルに達しているものは全くいなかった。意味がわかって、あの詠の元をたどるようなもの好きは彼女だけなのだろう。

――　酔狂なのは私だけってことか。

彼女は自嘲気味に苦笑した。その苦笑が、何かの引き金を引いたのか、群がっていた精霊の一部が彼女の存在に気付いてしまった。年若い精霊たちにとって、彼女の存在は強大で、畏怖を抱かせる。気付いた精霊は、たちまち逃げるように姿を消し、それに気づいた他の精霊たちも一斉に消えていった。

――おや、悪いことをしちゃったかな。折角集まってたのにねぇ。まぁ、しょうがないね。ちょっと召喚主の顔だけでもみて、私も退散することにしようかな。

そう思いながら、屋根をすりぬけて、屋敷のなかへ入り、召喚の魔法陣をみつけた。

――ほう、変な詠がはいってるわりには、結構良い魔法陣じゃないか。これは術者も期待出来るねえ。……おや、なんだい魔法陣は借り物かい。

スリヤは、魔法陣が書かれたときの魔法の波動と、自分が惹かれてやってきた魔法の気配が異なるもので有ることに失望した。自分で満足に魔法陣も書けないのにつられたとは、と思いながらも、魔法陣と同じ魔法の気配が近くにいることにも気づく。

――なるほどね、魔法使いの親が、自前の魔法陣で子供に守護者を付けようとしたってところか。うん、なかなかいい質の波動を持ってる。ま、うでは悪くないんだろうけど、あの詠で寄ってくるのは、意味の分からない小物ばかりだと思うがね。っと、こっちがあの波動出してた子供か。おやぁ、小さいねぇまだ2歳ってところじゃないか。にしてはしっかりと安定した波動だったけど……

その時、父親らしき魔法使いがつぶやいた。

「失敗？でも、マーヤには治癒の力をはっきり感じたぞ、それにあの、濃い気配…」

スリヤは実体化せずにいるため、魔術師であるカイルも存在を感知できないでいる。

――おや、この子の魔法の力は治癒なのか。なかなか珍しいじゃないか。それにこの感じ、ただのお子様じゃなさそうだね。……ど

れ、ちょっと挨拶してやるか。

スリヤは、実体化して姿を現すことにした。彼女のお気に入りの姿は、若い人間の女性に美しいカゲロウの羽根をつけたものだ。この姿は非常に人間に受けがいいのだ。そして、治癒魔法ということで、悪戯心を出した。古代文明の記録にある、治癒者の服装をしたのだ。もちろん、この場にいる人間がそれを知っていることなど、期待していない。

何の合図もせずに出るのも失礼だろうと、これも悪戯心で部屋いっぱいの光を出してから実体化する。部屋の中にはびっくりした顔の人間が3人。一人は魔術師。そしてその妻らしき女性。そして、その女性に抱きかかえられながらもこちらを眺める、小さな子供。呼び出した魔法の主だ。そしてその子供がつぶやいた言葉に、今度はスリヤが驚くことになる。

「ナースの、はくい……？」

――なんでわかるんだい？この衣装は古代文明が滅んだ時に消えたもんだよ？

「なんだか変な子だねぇ。こんにちは、お邪魔するよ、人間のみなさん」

――問い質すのは挨拶してからでも遅くはないからね。

傍らの魔術師――カイルは、どうにか最初に言葉を発する程度に落ち着いたようだった。

「ご機嫌いかがですか、上級精霊の方。言葉をお話になるほどの方を御喚び出来るような魔法陣ではないはずなのですが、もしかして何か御用でしょうか」

丁寧に話しかけるように気を付けているような口調だ。言葉を話す精霊は、非常に大きな力を持つことが多く、人間が下手な扱いをして激発したら、抑えるにはこの国の宮廷魔術師の総力が必要になるだろう。

スリヤが上級精霊であることを理解し、あの魔法陣がそんな存在を喚ぶことができないことを知っていたことに、スリヤは少し感心した。

「なかなか見る目があるじゃないか。あのひどい詠を書いた本人だとは思えないね。」

カイルがうろたえながら応えを返してくる。

「あれは、精霊に愛を訴えかけて、受け入れてくれる精霊をよぶものだと伝えられているのですが……もしや間違っているのでしょうか。」

「ふふ、ああ、ひどいもんだよ。ちょっと耳をふさぎたくなる」

スリヤが残酷な答えを返すと、カイルはますますうろたえてしまう。

「しかし、私も妻もあれで守護者を喚んでいるのですが」

「あれで、きちんと守護者が呼べたのは、あんたらの魔法の波動がなかなか魅力的だったからだろうね。あの詠はなんというか、思いが暴走した人間の妄言を並べたものにしか思えなかったよ。そのおかげで、単純にあんたらの波動に惹かれるだけの、若い精霊が喚

べたんだろう。意味が分かる連中は気持ち悪くて寄ってこないさ。」

そういうと、へこみ始めた魔術師に精霊を呼ぶのに特別な言語は必要なく日常語でも大丈夫だ、なんてことを教えてやる。そしてその傍ら、意識を子供に向ける。

『なんで私の着てる服のこと、知ってるんだい、お嬢ちゃん』

念話を受けたのは初めてなのだろう、その子は目を白黒させながら、それでも同じように心の中で念じて返事を返してきた。

『あなた、だれ……？』

『ほう、念話で返すとはね。私はあんたの正面にいる精霊だよ。』

『妖精さん？』

妖精、とつぶやいた子供の心の中に、今のスリヤと同じような格好をしたものたちが、空に舞う映像が浮かんだことを感じ、スリヤは驚く。

『私のようなものに、以前あったことがあるのか？』

『いいえ。昔、本で読んだだけ。』

『本で？そんな本がお嬢ちゃんの読める範囲にあるなんて不思議だな。この服を知っていたり、私の格好と同じものを見たことがあるようだし、なかなか面白い。おまえ、いったい何者だ？』

『えーと、マーヤよ。マーヤ＝アストリウス』

『ふーん。』

『……』

『こんな時にとっさに名前をいってごまかすとは、まったく驚くべき子供だ。まだ2歳くらいだろ。ま、それだけ頭がいいと、いきなりは私のことも信用は出来んだろうな。』

マーヤとの念話の傍らに続けていた、カイルとの会話は、「あとは自分で考えろ」で切り上げた。そして、声に出して宣言する。

「こっちのお嬢ちゃん、マーヤは気に入ったよ。私がしばらく遊び相手になってやろう」

マーヤが驚く。念話ではそんなに友好的じゃなかったのだ。

「あそび、あいて・・・？でも、おなまえもしらない…」

ようやく、そうとだけ抗弁する。

「おっと失礼した、私のことはスリヤと呼んでくれ。どこでも呼べばわかるようにあとで印をつけよう」

マーヤは不安そうに魔法陣の文字を眺めながら、確認する。

「えと、お友達になるってこと？」

――その詠、お嬢ちゃんは読めてるようだね。それに縛られる関係を嫌がってるのがはっきりわかる。ますます面白い。

そう思いながら回答を返す。

「ああ、お友達だ。その魔方陣の束縛は受けてないから、一生というわけではないが、とりあえずは私が飽きるまでは、お友達だ」

不遜な物言いの自称友達に、マーヤにっこり笑っていった。魔法で縛ったお友達なんてまっぴらだし、出会ってすぐに一生一緒にいるなんて決断はできるものじゃない。相手が母の守護者のような物

言わぬ精霊ならともかく、おしゃべりする精霊にたいしてだとちょっと失礼な気がしてくる。

「うん。じゃぁよろしくね、スリヤ」

「ああ、よろしくな、マーヤ」

スリヤは再度カイルのほうを向いて言う。

「マーヤの守護者は、まだ選ばないように。私が見極めてあげる。」

そしてまた、マーヤに向き直り、サーヤが抱くマーヤに羽ばたいて近づき、頭頂部に口づけをする。

「これで印はついた。お前がどこにいても私にはわかるから、会いたくなったら呼んでおくれ、マーヤ。」

そしてマーヤとサーヤからはなれると、、

「また来るよ」

といって姿を消した。

4．（スリヤ）（後書き）

スリヤの言葉使いがちょっとブレてたので修正&細かい描写に手を入れました。

１１／８　セリフのリズムが悪いところに手を入れました。
１１／２１　スリヤの大きさが変でした。文章の修正しました

5.

誕生日の翌日、我が家は朝から大忙しになった。普段は交代に通いで来てもらってるメイドさんが、二人とも朝からそろっている。我が家は、いまは爵位を持つとはいえ、父はもともと平民で、商人の娘である母も普段から家事を行う。だから住込みのメイドさんなどはいない。小さいなりに屋敷といえる家に住んでいるため、定期的な掃除などを手伝ってもらうために、交代で来てもらっている。

今日に限って二人とも来てもらっているのは、私の祖母のための部屋を用意するためだ。

――昨日、精霊のスリヤが去った後、父と母とが全然別の行動をとり始めた。

母は悩みを声に出していた。

「マーヤちゃんは、治癒の魔法が適正なのね。じゃぁどうしましょ、治癒の魔法って使い手の方がなかなかいなくて、教えてくれる人を探すのも大変だわ。でも折角だし、こんなに早く魔法の適性がわかることなんてないんだから、誰かに教わったほうがいいわ……」

母は、何やら私の魔法教育を本格的に始めるつもりのようだ。治癒魔法が珍しいということもあるのだろうが、おそらく守護者を喚ぶ魔法が、あんな形で失敗したので、ショックを受けてるのではないだろうか。もしくは私のショックを和らげようとしているのかもしれない。私としてはあの詠でよばれて、無理やりな友情を結ばれるより、スリヤと良い関係を築いたほうが有益だと思うのだが。

一方父は、何やらつぶやいていた。

「言語は何でもいい、だなんて。そんな馬鹿な……じゃあ、なんのために魔法文字を使ってるんだ。」「……エウレニア語で魔法陣を書いてみるか……」「いやそれだと何の魔法が誰でもわかる……」「……あ、別にかまわないのか……のような用途なら……」

よっぽどスリヤに聞かされたことが応えているようだった。魔法文字というのはラテン語のことだと思う。エウレニア語というのは私たちが普段使っている英語もどきの言語のことだ。ちなみに私が住む国の名前はファランク王国というらしいので、エウレニア語というのは他の国も使っている言語なのかもしれない。

「あなた、カイル、そんなことよりマーヤちゃんの先生を探しましょう」

母が父におだやかに声をかける。

「……待てよ、魔法陣を2重にして魔法文字とエウレニア語で複数の意味を持たせれば……」

父は母の声が耳に入っていないようだ。よくあることだが、大抵この後は、あまりいい状況にはならない。母は抱いていた私を、おもむろにソファーに座らせてから、一度大きく息を吸い込んで、怒鳴る。

「あなたっ！カイルッ！」「誰もが使うような……」

ああ、母のまなじりが上がっていくのが見える。なんでこの声が無視できるのだろう。

「……あなた」

こんどは一転、つぶやき程度の、平坦で乾いた声で呼ぶ。

「おおお、なんだサーヤ。あああ、マーヤの先生役なら母に頼めばいいだろう。」

大きな声で怒鳴っていても聞いてくれないのに、小さく、平坦な声で囁くと驚くほど素早く的確な回答が返ってくる。……前世の私も同じような経験が何度もある。どこの世界でも、夫というのは何故こうも度し難いのだろうか。

「お義母様は辺境に住んでらっしゃって出てこないじゃないの。まさか、マーヤを辺境にやるなんて言わないわよね。」

母の声が平板なままだ。前世の娘と同じ世代なのだが、今の私にとってはやはり母なのである。怒れる母は心臓に悪い。思わず母に加勢する。

「おとうたま、とおくへいくのはやでしゅ」

女は　団結するものなのだ。

「ほらごらんなさい！あなたもまじめに考えてください」

母の声がちょっと明るくなった。娘が加勢する母親というのは非常に強気になる。これもまた度し難いかもしれない。

「いや、母に来てもらうようにするから、大丈夫だよ。明日にでも用意しよう」

その時は父が母の怒りをそらすための逃げの手を打ったのだと思った。母も疑わしそうに父を見ていたが、怒鳴って気が晴れたのか、それとも私が味方に付いたことで溜飲が下がったのか、それ以上の追及はなくなった。

父は辺境の祖父母の家に遠話で何やら話した後、すぐに祖母の部屋の準備のための手配をした。二人のメイドさんをお願いするだけだが。それが終わると、ほっとしたようにいそいそと書斎に籠りに行った。エウレニア語の魔法陣を試していたのだろう。

そして、あけて今日、私に魔法を教えるために、我が家に来る祖母を迎える部屋の準備に家中が大わらわなのである。祖母の部屋は、二階の北側の部屋になった。

「お年寄りに二階の北側って、ご主人は何をお考えなのかしら」

部屋のなかのさまざまなものを取り除いている間、私の面倒を見てくれることになったメイドのミラさんが不思議そうにつぶやいている。私に聞かせようとしたのではなく、ただ口に出さずには居れなかっただけなんだろうと思う。私も同じことを思っていた。その部屋は、普段使われない部屋で、物置代わりになっていたのだから、丁度良いと言えば良いのだが、日当たりを考えに入れないでいいのだろうか。祖母はまだ５０歳で足腰もしっかりしているのだが、だからと言って二階に部屋を作るのは非常識じゃないのだろうか。それとも魔法で何とかするのだろうか。などといろいろと疑問に思っていたのだ。

とはいえ、父はともかく、そういうことに気が利くほうの母も納得して作業しているようなので、口は出さずにいた。

やがて、物置状態だった部屋が、気持のよいリビングのようになり、ひと組のソファーが運び込まれて、作業を終えた。昼食は、労働をねぎらうように、メイドさんの二人も一緒に食卓に付いた。貴族の食卓で使用人が同じテーブルを囲むことはないらしく、二人とも恐縮していたのだが、父や母がそんなことに頓着するはずもなく、母の手作りの料理を並べて一緒に昼食となった。

昼食後、手伝ってもらった二人にお礼を言って帰ってもらうと、父が私を抱き上げて二階へ上っていく。祖母の部屋に行くのだろうが、何の用事だろうか、と疑問に感じていると。

「じゃあお母さんをここに呼びましょうか。」

父が宣言し、祖母の部屋に魔法陣を広げ始めた。

……今から、ですか？

5．（後書き）

短めです。
中途半端なところで区切って申し訳ないです

6.

祖母を呼ぶ。父はそう言って、祖母の部屋の真ん中、ソファーテーブルを挟んで、ソファーと対峙するような位置に、大きな四角い紙を広げ始めた。真ん中に書かれているのは――魔法陣だ。

父の用意したその魔法陣は、何やら真新しいもので、ひと眼見て、昨日あの後に書いたのだと、あの場にいたものならわかる代物だ。魔法陣のなかで、魔法文字――ラテン語で書かれるべき呪文が、エウレニア語で書かれているからだ。新しい知識を早速試したらしい。魔法陣を広げる前にソファーに座らされている私には、何を書いているのか、一目では読み切れない。細かい文字でかなりたくさん書き込まれていて、「呼ぶ」とか「繋ぐ」とか、そんな言葉が多く使われているようだ。

「さあ、マーヤ、お前のおばあちゃんをここに呼ぶよ。」

ここに？呼ぶ？

「おばあたま、ここにくるのでしゅか。」

「来るといってもこの魔法陣からは出てこれないんだけどね」

――それはまるで悪魔召喚の様じゃないでしょうか。

そんなことを思っているうちに、父が何かしたのだろう、魔法陣の上の空気が揺らいで見えてきた。すぐにその揺らぎが消えたかと思えば。魔法陣の真ん中に、椅子に腰かけた女性の姿があった。歳のころは５０くらいだろうか。祖母だろうと思うが、以前会ったの

はまだ、私の目が開いていなかった時なのだそうで、判別はできない。実際のところ、私は、突然目の前に現れた人におどろいて、それが祖母かどうかなどということに気が回っていなかった。

「おかあさん、こんにちわ。お時間をとっていただいてありがとうございます。」

「カイル、何を水臭い話し方してるの。私に対してまで貴族みたいな話し方をする気？」

父が少し緊張気味に言っているのを祖母がまぜっかえす。祖母の優しい声に私も少し我に返る。

「さあマーヤ。おばあちゃんに挨拶しなさい」

あわてて、ソファーを降りようとすると、母が私を抱き上げて、祖母の近くまで連れて行ってくれた。

「お義母様。お久しぶりです。わざわざありがとうございます。」

そう挨拶しながら、魔法陣の外で私をおろす。

「マーヤちゃん、挨拶してちょうだい」

「おばあたま、こんにちは。きょうはとおいてょこりょありあとうございまた」

長い文章はまだ噛んでしまう。「今日は遠いところ、ありがとうございました」と言おうとしただけなのだが。

すると祖母は、優しいそうな丸い顔をほころばせた。

「まぁまぁまぁまぁ、なんて可愛らしいんでしょう。それになんてお利口さんなんでしょう。歳は二つになったばかりなのよね。女の子だとしても、成長が早すぎるんじゃないかしら」

最後のほうは独り言のように言っていたので、お返事はせずに会釈だけ返すことにした。そして気になっていることを父に尋ねた。

「てれぽーとなんでしゅか」

「いいえ、転移（テレポート）じゃないわよ、この子はまだ転移は使えないの。これはマーヤちゃんの御祖父ちゃんとお父さんが一緒に考えた魔法で、私の姿を辺境から王都に送ってくれるのよ。転移なんて言葉、よく知ってたわねぇ」

祖母から回答が返ってきた。なるほど、テレビ電話みたいなものなのかな。魔法陣の中の「繋ぐ」とか「呼ぶ」は電話と同じ感覚なのかも。

「母さん、転移は別に僕ができないってわけじゃないだろう、あれは原理的に無理だって言われてる魔法じゃないか」

父が祖母にクレームをつけている。この口調が素なのかな。ちょっと乱暴というより、庶民的な感じだ。

「あら、あなた達はできないって言われてたことも、結構できるようにしてきてたじゃないの。」

「出来る出来ないのレベルがちょっと違うんだよ。」

父が疲れたような声で返している。祖母の言う「あなた達」とい

うのが父と祖父のことだというのは、後で知った。二人でいろいろと新しい工夫を考案しているらしい。

この母子の掛け合いの間、しばらく完全に私と母は置き去りにされていたのだが、祖母の人柄や、父のあまり見ない姿を見られて、なかなかに楽しんでいた。

父がこんなに慌てたような、思い通りにいかなくてもどかしい様な顔をするのは、母を怒らせてしまって、機嫌を取ってるときくらいしか見たことがない。少し可哀想になってきた。

「おばあたま、わたしにまほーをおちえてくれるのでしゅか」

両親のフォローって二歳時のスキルとしてはどうだろうと思うのだが、このまま話が進まないのは困るので、割り込んだ。

「まぁなんて可愛いんでしょう。そうね、マーヤちゃんは治癒の適性があるんだわね。私が知ってる治癒の技は全部教えてあげる。」

「ありがとうございましゅ」

「でもねぇ、そんな他人行儀な話し方じゃ、私はいやだわ。マーヤちゃんも、堅苦しくなぁい？」

祖母が満面の笑みを浮かべながら言う。その眼差しには少し、悪戯を仕掛ける少女の笑顔のようなものが含まれているように見える。その悪戯の対象は、おそらく私ではなくて、祖母の息子、わが父だ。

「お約束しない？私はあなたのことをマーヤと呼ぶから、あなたも私のことをライラって呼ぶの」

父が息を大きく吸い込んだような音が聞こえた。

「はい。ライラ」

祖母の、いやライラの悪乗りに乗っかってしまった。正直なところ、前世での私が死ぬ前にお婆ちゃん呼ばわりされたら気分がよくはなかっただろうから、それと同じくらいの年の女性のことを、おばあちゃんと呼ぶのには少し抵抗があったのだ。

横目で父を見ると、なにか悪いものを飲み込んだような顔で、目を白黒させている。自分の母と娘がファーストネームで呼び合うというのは心臓に悪いかもしれない。そして母はというと、こちらは笑いをこらえ切れないように、赤くなった顔に変な力が入っている。美人が台無しだが、なんだか可愛らしい。

祖母、いやライラは目をきらめかせて、息子にたいして面白そうな視線を向けると、私に向きなおった。楽しそうに声を弾ませて言う。

「マーヤ、あなたって女心がわかってるわ。あとは丁寧語もやめましょうね」

――ライラ、それは男性に言うセリフではない？というより2歳児を形容する言葉ではないのでは。

「私たち、すごく仲良しになれると思うの、ずっとお友達でいましょうね」

「はーい」

頭を抱えてる父の姿が見えていたがあえて無視した。母は、こらえ切れなくなり、声をあげてソファーに座りこんで笑っている。ライラには心臓の病気を治す方法を最初に学ぶべきかも。

こうして、私は祖母と大の仲良しになった。これから週に1度のペースでこうして遠隔でライラの家庭教師を受けることになった。

ライラが去ると、幾分ほっとしたような父と、笑いが収まった母が、一日遅れの誕生日ディナーでお祝いをしてくれた。昨日は二人ともそれどころじゃなかったのだ。そして、例の精霊石はペンダントにしてくれると約束してくれた。

新しく学ぶことになった全く知らない知識に、期待を膨らませながら、その日はぐっすりと眠ったのだった。

父と母は、そのあと二人の間で親交を確かめ合ったようだ。3歳の誕生日を迎える前に、私には新しい家族が増えた。

そして、3歳の誕生日には、両親と生まれたばかりの双子の弟妹、そしてライラが誕生日ディナーの席でお祝いをしてくれた。

6．（後書き）

ここで一章は終わりです。といっても起承転結の起っていう程度の意味です。
次は3人称であの人視点の話を書こうと思っています。

所用でちょっと間が空いてしまいますが、すぐに続きを書くので待っててください。＞（｜'｜）＜

生と死の女神

マーヤに挨拶をしたあと、スリヤはすぐに精霊界に戻り、ある存在を探し始めた。スリヤがミルと呼ぶ、上位の精霊だ。彼女ならマーヤのことを詳しく知っているはずだと、スリヤは確信していた。

上位の精霊といっても、力が強いとか長命だという程度の意味で、特に上司部下というわけではない。精霊や神霊は、自由に選んだ相手と、自由な条件で契約をすること以外では、原則として束縛されない存在なのだ。――彼らの存在の根幹を規定するといわれ、尚且つ詳しいことは知られていない、始源契約を除いては。

――ミル姐、一体どこにいるんだい、以前はこのあたりで封印されてたってのに。

スリヤがミルと呼ぶ精霊は、好奇心が旺盛すぎるところがあり、いろいろと実験をするのが趣味で、人間との契約なしで、人間社会にもちょっかいを掛けることが多い存在だった。しかし、人間との契約なしで人間社会に関わることは、始源契約に触れやすいのだ。

しかも理不尽なことに、何をしても良く、何が悪いのか、誰にもわからないので、普通、精霊は人間との契約なしでは人間に関わるのは避けるのだ。

ミルは、２００年ほど前にその禁忌に触れたらしく、大洋の真ん中にある、大陸を遠く離れた孤島に隣接した精霊界で存在を固定されてしまい、動けなくなっていた。５０年ほど前に、自己を確立したばかりのスリヤが闇雲に飛び回っていた時に、たまたま見つけるまで、孤独にただ存在していたらしい。自分より遥かに上位の存在

に懇願されるまま、定期的に話し相手を務めることになったのが友誼の始まりである。

地上界、精霊界、というのは特に離れた位置にあるわけではなく、精霊達の認識では同じ空間の別の相のようなものである。もしミルの封印場所が、地上界で人が多いところに隣接していた場合、強い力を持つ人間ならミルを見つけ出すことが可能で、挙句に封印されているのをいいことに無理な契約をする恐れまであったらしく、ミルが存在を固定された場所は人間も、精霊すらも普段は寄り付かないところだった。ミルは、人や精霊の気配すら１００年以上も感じなかったようだ。それだけに話し相手は殊更に喜ばれ、さまざまな知恵を授けてくれた。おかげでスリヤは１００年程度の存在としては大きな力を持つ存在になれた。

その、隔絶された地にいるはずのミルがいない。気配をたどろうにも上位存在の気配をたどるのは困難だ。

……スリヤがそうやって困惑していると、不意に能天気な声が響いた。

『やっほ～。スリヤ、そこにいるの？わたし、今はそこから離れてるから、こっちに来て～』

ミルからの念話だった。どうしてだか封印が解けて、別のところにいるらしい。

――やれやれ、わざわざこんなところまで来たってのに。

スリヤがミルの念話を辿ると、発信源はなんと、ファランク王国の王都だった。

――ふうっ……引き返しますか。

◆　◆

「あれ～、スリヤ。何その恰好。あなたもついに契約したの～？」

スリヤはまだ、羽の生えた妖精の形をとっていた。地上界での実体化は解いたが、なんとなくこの格好が気に入ったのだ。

「ちょっとこの格好が気に入っただけだよ、ミル姐こそ、なんだいその恰好。どこぞの人間にとっ捕まったのかい」

スリヤの前には、美しい人間の女性の形をとった存在があった。まっすぐに腰のあたりまでのびた髪は艶やかな黒で、形の良い逆三角形の顔には、大きな黒い瞳を擁する切れ長の目と優しげな唇、そしてそれをつなぐようなきれいな鼻が収まっている。

「これぇ？私のほうは、神格を得ちゃったのよ。」

こともなげに言うミルにスリヤは驚いて噛みついた。

「神格って……ついこの間まで封印されてたのがいきなり？そんな馬鹿な。２００年前に勝手にどこかの人間転生させてお仕置きされたんじゃなかったの？」

「封印されたけどお、理由も何も誰も教えてくれないわよ。それにこれだって突然で強制的なのよ。」

不満そうに言う。その膨れた顔も、人間の男が見れば魅了される

こと間違いない。

「なんだかぁ、封印が解けたのを感じたから、年季が開けたかなぁと思ってたのよ〜。そしたら、いきなり神格とこの形を持ってここに存在させられたの〜。前より自由に動けるけど、禁固の次は強制労働って感じよ〜」

緊張感がない話し方なので怒ってるように聞こえない。

「始源契約と、その強制力ってなにも説明してくれないんだねぇ。ミル姐の封印のことを知らなければ、本当に存在するものだとは、わたしだって思ってなかったかも。にしても神格っだって？一体どんな？」

なんか馬鹿げたものをやらされるのかと思って聞いた。半ば愚痴を聞かされる覚悟をしている。

「ええとお。今の私の名前はミストレイヤ、生と死をつかさどる神よ〜。」

――えっ？

「……それって、このあたりの人間の信仰で、主神の一柱じゃない？」

「そうよぉ。もう参拝者が多くて多くて〜。」

生まれた赤子に祝福を与え、死者に安らぎを与えるとされる女神だ。死後の安寧を願う人々も普段から神殿には捧げものをする。このほんわかとした能天気な存在に勤まるのだろうか。

……そこでようやく、スリヤはミルを探していた理由を思いだした。

「ミストレイヤ、いや、ミル姐でいいよね。聞きたいことがあるんだけど。」

「なぁに～？」

呼び名はミル姐でいいようだ。信者や神官に話しかけるときはもうちょっと威厳出してほしいなと思いつつ、先ほどからの疑問を口にする。

「あの子、マーヤはミル姐が転生させた子でしょ？えーとなんとかって魔術師の娘よ。王都に住んでる」

一瞬、ミルはきょとんとしたが、やがて合点がいったように顔をほころばせて答えた

「あら、マーヤちゃんのこと知ってるのぉ？もしかしてその格好もあの子との契約の結果？」

精霊は人間と契約をすると、契約相手に分かりやすい形に固定される。ミストレイヤの姿も信者の望む姿だ。

「これは好きでやってるだけ。契約はしてないよ。それより、せっかく神格得たってのに、またお仕置きされるよ？」

じゃれ合おうとするミルをいなして、話を続ける。

「もう、連れないなぁ……。転生のことなら大丈夫よぉ、ミストレイヤは転生も司ってるみたいだし。前のミストレイヤも転生は一回、かな？やってるし。なんか、私が前にやったのがね、結果としていいほうに転がったらしくて、そのあとミストレイヤに追加された職分みたいなのよ。……これってずるいと思わない～？それだったらなんで、私は２００年も封印されてたのよお？」

――なるほどね、これも始源契約関連なんだろうな。

「罪は罪で２００年幽閉されて、功績のほうが神様への抜擢なんじゃないの？でさ、そのマーヤのことなんだけど、なんか特殊な力とか使命とか与えたの？」

わざわざ転生させるのだから、させたいことでもあるのだろうと聞いてみる。

「えー、そんなことしたら面白くないじゃない～。適当な魂をもらってきて、良さそうな両親のとこに送り込んだだけだよ。上手くいけばなんかいい影響与えてくれて、人間界が発展するかもしれないけど、だめだったらだめで別にかまわないし～」

期待外れもいいところの回答が返ってきた。

「無責任だねぇ。転生させるだけさせてあとは放置？」

「だって、契約なしに人間界にはそんなに介入できないでしょ？それにあの子の前世ってこの世界の古代文明ですらなくて、わたしも知らないようなことといっぱい知ってるんだよ。そんなの怖くていじれないし、前もそんな感じで放っておいたらうまくいったから、大丈夫だよ。」

「おかしいな、あの子からはなんか変わったものを感じたんだけどねえ。本当に何もやってないのかい？」

ミルがこういうことで嘘をついたりはしないことを知っているのだが、納得がいかないので、再度追求する。すると、ミルがなんだかふんわりと笑いながら、言った。

「わたしも知らないような世界からの転生よ～？何があるかなんてわからないわよ～。なんでそんなところからって？　転生させられる手頃なのが無かったのよね～。」

「なんだか納得いかないねえ。」

「納得いくまでマーヤちゃんとお話ししたり、一緒にいればいいんじゃな～？まだ2歳だし、何者かになるにはまだ時間かかるんじゃないかな」

――2歳と言えば。

「2歳にしては、あの子えらく大人びてたんだけど、転生の影響？」

「そりゃあそうよ～。あの子は自我を確立して生まれてきてるんだし、言葉だって前世で知ってる言葉だったみたいだから。あの子は、子供のころから、あの体で話をすることとかあ、歩くことに慣れる努力してたみたいよ～」

――人間の成長ってのはよく解らないねえ。

「ま、いいや。あの子を転生させて、ミル姐が困った羽目になってはないことと、特別な力を与えてもいないってことはわかったよ。でもねえ、なんだか納得いかないし気になる。しばらくあの子の様子見ることにしようかね」

「あら、じゃぁ適当に報告くれない？私はほかにも見る子たちがいるのよ～。前任が転生させた子たちとか～。そんなに手のかかる子たちじゃないんだけどね～」

ふっと鼻を鳴らしながら、スリヤは答える。

「わかったよ、また適当に話に来る」

「今回みたいに3年も間を空けるのは駄目よお」

ミルの声を背中で聞き流しながら、その場を後にして、マーヤのところへ戻ることにした。同じ王都なので、スリヤにとっては大した距離ではない。そしてマーヤの居場所を探す。

――あ、みつけた。

まだ子供のマーヤは当たり前だが自宅にいた。

その後、マーヤの傍ではひらひらと飛ぶ姿が見られるようになった。その精霊は、薄くて透明な羽と、美しい肢体をもち、キラキラと輝く金髪の小さな女性の姿をしているという。

生と死の女神（後書き）

説明っぽい話でした。
次回からは話が進む予定です。（進みませんでした＞（　）＜
１１／１１）

１１／１１　校正しました

宮廷魔術師の朝（前書き）

すみません。息抜き話です。しかも短い。
次こそは話を続けます。

宮廷魔術師の朝

宮廷魔術師カイル＝アストリウスの朝は、妻が作る朝食を食べることから始まる。いや、食べ終わってから始まると言うべきか。宮廷の仕事とは別に、夜遅くまで魔法の研究をするため、朝は大抵寝ぼけていて、朝食を取るまでは、頭がまともに働いていないのだ。

その日も、半ば夢の国をさまよいながら、朝食を機械的に口に運んでいたところだった。カイルが愛して止まない長女が、話し掛けてきた。3歳の誕生日を迎えるころには、ずいぶんとはっきりと話すようになっていて、その成長がカイルにはうれしい。マーヤは、彼の頭がはっきりするまでは、普段なら話し掛けてはこないのだが、その時カイルはそれを訝しむことすら出来なかった。

「お父様、今日は私も王宮に連れて行って下さい。」

完璧だ、とカイルは思った。妻譲りの金髪に、まだあどけない可愛らしい容姿と、少し甲高い声、おねだりする時の潤んだ灰色の瞳。この子は将来絶対に美人になる！

「いいとも」

娘の魅了に骨抜きにされた親バカな父は、深く考えもせず、了解してしまっていた。

「あなた！」

同じテーブルで朝食を取っていた、妻のサーヤが驚いて遮った。

「一体なに考えてるの？いいえ、なにも考えてないわよね、まだ寝ぼけているもの。マーヤはまだ三歳なのよ、王宮に連れて行って誰が世話をするのよ。」

「何の問題もないだろう、サーヤ。マーヤは三歳児とは思えないくらい賢いし、おとなしくしているなら仕事の邪魔にはならないよ。それに君は双子の世話に係りっきりで、マーヤの相手をあまりしてあげられないだろう？」

ようやく働いてきた頭は、マーヤを連れて行くことを前提に、論理を紡ぎ出していく。連れて行くことの是非については、寝ぼけているときに、すでに決着をつけてしまっている。そして、そのあとも、あれこれと言葉を尽くし……

……結局、連れて行くことで押し通してしまった。

そして……

「マーヤちゃんから目を離さないで下さいよ。しっかりしていても3歳なんですから。」

出がけに妻から念を押されるのに、心ここに非ずという感じで頷きながら、マーヤを自分の前に抱えて、馬上のカイルは首をかしげていた。

――なんで連れて行くことになったんだったっけ？

1.

ファランクの王都ローランディ。中心にある広大な王城の東門から、東にまっすぐ伸びる街道を挟むように、東西に数マイルにわたって街が広がっている。城門に近い街道沿いには、大商会の商館が建ち並び、街はそれらを中心にして扇状に広がっている。

東ローランディと呼ばれるその地区の下町にライラが移り住み、治療院を営みだしたのは、私が3歳のころで、もうかれこれ3年になる。6歳の誕生日を迎えた今年の夏、私も父と母の了解を得て、治療院でライラの手伝いを始めることにした。

治療院の奥の調剤用の部屋で、私は精神を集中して、イメージとともに力を放つ。

《乾燥》

風と火を組み合わせた魔法を使って、今朝ライラと一緒に採ってきた薬草を乾かしているのだ。

私は東ローランディの城門近くの我が家から、毎朝迎えにくるライラと一緒に、少し離れたライラの店まで通っている。その道すがら、薬草を摘むのが日課になっていて、今乾かしているのは今朝採ってきたものだ。市街を守る城壁の中にも、小さな林や緑地が残っていて、結構な種類の薬草がそこで調達できる。今乾かしたものは、服用すると解熱効果がある。

前世で看護師をやっていたとはいえ、薬草なんかに詳しいわけではない。知っている薬草だって加工された後のものばかりで、地面

から生えているものの名前や薬効がわかるわけではない。なので、ライラとの採取のときはノートを欠かせない。

「マーヤ、乾燥できたかしら？」

調剤室を覗きに来たライラが聞いてくる。彼女は治癒以外の魔法は使えないため、魔法で普段は天日で薬草を乾燥させているが、私がいるときは、魔法での乾燥も利用するようになった。

「今日採ってきた分は乾燥させたわ、ライラ。他のものも乾燥させましょうか？」

一代限りの爵位とはいえ、仮にも貴族の娘が祖母で師匠でもある人に対する口調としてはいただけないが、改まった口調で話すとライラは口をきいてくれなくなるので、すっかり対等に話すようになってしまっている。

「今日の分だけでいいわよ、天日で乾かすものと魔法で乾かすもので効き目に違いが出ないか確認したいから」

この世界の日光にも紫外線が含まれているだろうし、紫外線で薬草が変質して薬効成分ができることもあるのだろう。ライラがそこまで解かっているかどうかは分からないが。

「了解。じゃぁ、今度はすりつぶして混ぜるのをやるね。」

このようにして、マーヤの治療院では、ほとんど薬の調合を手伝いながら盤供する毎日だ。薬の調合や採取は家で勉強しているころからやっていたので、やることは変わらないのだが、ライラが治療院を空けられる日数は限りがあるので、家庭教師の形だと、週に一

日程度しかとれない。今のように治療院を手伝っているとそれだけで勉強になるため、私の薬草の知識と理解は、ここ数カ月で格段に伸びたと思う。それになにより、下町の町人の生活を垣間見ることができるのがすごく楽しい。

「混ぜるのは急がないわ。リルちゃんが来てるわよ」

リルというのは、治療院近くの宿屋兼酒場の主人の娘で、毎日のパンを焼くための酵母をライラから買っていく。ライラお手製の酵母は、ふんわりとしたおいしいパンを焼くのに欠かせないものらしい。

「うちのパンは貴族さまでもおいしいって言うに違いないわ」

私の父が貴族だとは知らないリルは、私に対して胸を張り、にこにこと笑いながら楽しげに言う。この新たな友誼を大切にしたいため、私はライラの知り合いの娘だということになっている。リルの家の酒場である、”陽だまりの猫”亭は、行商人や町の外に出て魔物を狩ることを仕事にしているハンターと呼ばれる人たちが多く使い、そういった人たちがパンを誉めそやすのだそうだ。

この国では、王宮や貴族の暮らしと町民の暮らしでは格差がある。前世での知識と照らし合わせて、凡その予想はしていたのだが、それはいい方向で裏切られた。確かに明らかな格差もあり、貴族に比べれば不便な生活だったりするのだが、この国では多くの町民が最低限の生活水準は確保されているように思えた。

貴族や王宮では、生活を補助するさまざまな魔法器具が使われていた。たとえば灯りの魔法を使った照明や、水の魔法を使って飲み水を出す器具、洗濯や掃除も魔法を利用した器具の補助がある。だ

から我が家も使用人を住み込みで雇う必要はないのだ。ただ、大貴族等になれば見栄もあるのか、多くの侍女や使用人を雇っているもののようだ。

一方、町民の生活には魔法の補助がほとんどない。ただたとえば灯りは獣脂を利用したものが一般的にもつかわれているし、安価に流通している。また驚いたことに上下水道も完備している。

もちろん蛇口をひねれば水が出るというものではないのだが、地下に石で囲われた水道があり、王都の北部にある湖から水を引いている。そこを流れる水を井戸のように、木桶と釣瓶でくみ上げるのだ。これを初めて見てそれが井戸だと思ったのだが、ライラが上水道だと教えてくれた。日本の江戸時代にも、また古くにはローマ時代にもこのような上水道の設備があったらしいということを前世で読んだ記憶がある。人間、いつの世にも考えることは似ているのかもしれない。

下水も各所に設けられた公衆の設備からもっと深いところで集約し、町の外に捨てているらしい。治癒者を志す者として、衛生面にかかわる設備は気になる。見学できるかどうか、いつかライラに聞いてみようと思う。

「リルのうちのパンは本当においしいよね。もう他のパンが食べられなくて困ってしまう。」

「これからずうっと、うちのパン食べればいいのよ。お父さんお母さんにも持って帰ってあげられればいいのにねっ」

リルは、私の両親が王都から遠く離れたところに住んでいると思っているらしい。すこし、同情するような口調で言う。

「そんなことをしたら大変よ、その次の日からはいつも食べてる

パンが食べられなくなるわ。同じパンだと思えなくなるもの」

実は我が家ではライラの酵母を使って母が同様のパンを焼いているのだが、それを伝える必要はないだろう。

そんなこんなで３０分ほどお喋りをして、リルは酵母を受け取って帰って行った。

――おひるごはんまで少し時間がある。治療魔法の練習をしてみよう。

ライラに治癒の技を教えてもらいながらも、自然を扱う魔法は独学で父の書斎の本で勉強して、身についてきている。乾燥させることに使ったりもして、かなり慣れているほどだ。

反対に、治癒魔法に関しては、全く使えないままだ。……もしかすると私は治癒魔法が使えないのかもしれない。最近そう思い始めている。

1．（後書き）

2歳の時の儀式で得た治癒の力って話はどうしたのか・・・

いずれわかります。

2.

――えーと。まずは息を整えて、自分の体の中のプラナを意識する。うん、これはできる。

プラナとは、治癒魔法を行うときに利用する、どんな生物の体内にもあり、普通は目に見えないもの、なのだそうだ。私は霊気のようなものと考えて自分を納得させている。呼び方が馴染みのあるものになっただけで、わけがわからないことは同じなのだが。プラナは、生きているものすべての体内に存在していて、植物の中にも存在する。前世の私に言ったら、鼻を鳴らして無視されただろうが、実際存在するのだから仕方がない。少なくとも自分の体内のプラナは感じることができるし、操れるのだ。

近くに鉢植えしている薬草に目を凝らす。

――やっぱり視えない、か。

治癒魔法を使うには、まずは自分のプラナを意識して感じること。そして、患者のプラナを視ること。視えたプラナから患者の状態を把握して、その上で自分のプラナを通じて患者のプラナを操作することで治癒していくのだ。

私は患者のプラナを視る段階で躓いてしまっている。どう目を凝らそうとも、自分の体内にあるプラナ以外は視えないのだ。これにはライラも困惑していた。普通は自分のプラナを意識できる場合は視ることに問題は出ることはないそうだ。だから、解決法がない。そのため私は、プラナを感じられない人と同様に次のステップ、患者のプラナを操作する方法を学ぶことができない。私が意識してる

プラナは錯覚なのかと思ったこともあったが、私がプラナをきちんと意識し、しかも自分なりに整えていることは、ライラが視て確認してくれている。

――しょうがない。いつも通り、自分の点検しましょうか。……内臓良し、血液良し、手足も問題な……あ、ふくらはぎに切り傷発見。……えーと、プラナを巡らせて……

今、他人のプラナを視られないのは仕方がないが、何かの拍子で視られるようになるかもしれない。その時のために、自分の体のメンテナンスをすることでプラナの使い方を練習するのが日課になっている。プラナを体内で循環させれば怪我がないか、病気になっていないか、などがわかる。そしてプラナから力をもらって体の持つ自然治癒の力に加えてやることで治癒を早める。

……林の下草で切ったのだと思われる、ふくらはぎの浅い切り傷は、見る間に塞がった。

――自分の体だと、こんなにうまくいくのにね。

しかし、自分のけがや病気しか治せないのは医者や治癒者とは言えない。

ライラが魔法を教えてはじめてくれたときに初めて、自分にはプラナが視えないということと、その意味を知った。その時はさすがに落ち込んだものだ。それも仕方がないことだと思う。治癒魔法を使ってこの世界でも人の命を救う仕事をするという、私が2歳にして立てた目標への道程は、その入り口で躓いている形なのだ。

そのあと、父の書庫の本やライラの蔵書を読み漁り、何か解決方

法がないか、懸命に探した。そういえば、その際ライラには、字が読めることがばれてしまったのだが、反応が普通じゃなかった。

「あらマーヤ、字が読めるの？すごいわねぇ。じゃぁ私の本も持ってきてあげるわ。」

この時、私は3歳で、私が2歳のころから礼儀作法や一般教養を含めて教育のすべてを担っていたのはライラである。文字を学んだのがいつなのか、疑問に思ってもよさそうなものなのだが、私は字が読めるという事実だけを把握すれば十分という雰囲気だった。両親にも確認した様子はなく、父も母も私に字を教えたのはライラだと思っているようだ。

――なーんかあるわよねぇ。ま、いずれ話してくれるでしょう。

もしくは、いずれ私から話すことになるかもしれない。

そんなことを考えていると、治癒室の方からライラがやってきた。午前中、けが人が来ていたようだ。

「マーヤ、お昼にしましょう。今日は”陽だまりの猫”にいかない？」

「あれ、外に食べに行くの？珍しい」

「今日はあんまり人がいないのよね、何かあるのかなと思って。酒場だったらいろいろ知ってる人多そうだから、ちょっと話を聞いてこようかと思って」

患者が少ないというのは、治療院の経営を考えなければ、そんな

に悪い話ではない。でも今日に限ってというのは確かに気になる。

『なんか、余所の国のお偉いさんが来るらしいよ』

いきなり念話で話し掛けてくる者は決まっている。

『スリヤ、いたんだ。姿を見せずにいきなり話し掛けないでって言ってるじゃない。余所って？』

『あたしは、人間の国の名前って覚えんの苦手でさ、よく解らんよ。なんだか南からくるみたいだよ』

言いつつ、スリヤが姿を顕す。最初に会った時と同様にナース服妖精だ。これ以外の形態にもなれると本人は言うが、たまに服の色が変わる程度で他の姿を見たことがない。

「あら、スリヤ。お久しぶりね、今日も可愛らしい格好だねぇ」

いきなり現れた精霊に驚いたライラが、目を丸くしながら挨拶する。ライラにしてみればいきなり小妖精が目の前に出現したのだから、驚くのも無理はない。

「北の森の賢者どのにはご機嫌潤わしゅう存じます。森の者共も喜んでいることでしょう」

スリヤが、いきなり変なことを言い出した。北の森の賢者？

「おやまぁ、王都にいてその名で呼ばれるとは思ってもいなかったわ。伝言を伝えたのはどなたかしら？あ、そうだ。あなたまであの子たちの口調を真似る必要はないのよ」

「ありがと。伝言もらったのは、北の森のブナの大木の精だよ。今朝散歩してたら呼び寄せられちゃた。ライラってあの木を助けたことあるんだって？」

「たまたまよ。私の治癒は樹でも癒せるし、近くにいたからね。そんな話はともかく、お昼にしましょうよ。おなかすいたわ。」

ライラにそんな二つ名があったとは、全然知らなかったな、今度きちんと話をしてもらおう、などと思いつつも、私自身お腹が空いていたこともあって、足早に”陽だまりの猫”に向かった。

3.

治療院を出た途端スリヤが姿を消す。

私が魔法の視力で視ると、消える前と同じ格好の彼女が半分透けたようにして視えている。精霊は、魔法の力を空中で伝えるマナというものが集まってできているらしい。マナというのは魔力の素のようなものなのだが、こちらは父の力を受け継いだらしい私には視えるのだ。これは魔法の力を持たない人には視えないらしい。この視力がプラナにも効けばな、とつくづく思う。

「南の国から貴族が来るって。スリヤが言ってるわ」

歩きながら、ライラに話しておく。

「貴族が来るのと、人がいないのってなにか関係あるのかしらねえ。嫌なことになってなければいいんだけど。グンデが何か知ってるかしら」

ふう。とため息をつきながらライラがつぶやく。グンデさんというのはリルの父親で”陽だまりの猫”の亭主兼料理人。リルの母はコリンさんと言って二階にある宿泊用の部屋の掃除や、準備を一手に引き受けている。

「あっ！マーヤっ！ライラっ！いらっしゃ〜〜いっ！」

元気に声をかけてくれるのはリルだ。昼の間は給仕を手伝っているのだ。子供とは思えないほどしっかりしていると思う。今も大きなお皿を危なげなく抱えてテーブルに運んでいる。この時間はテーブルのわきにリルのための小さな段がしつらえてあり、それを上っ

てお皿をテーブル上に置く。

「おう、ありがとよ、リルちゃんは働きもんだな。」

馴染みらしい傭兵風の男がリルから皿を受け取っていた。何かの肉の煮込みのようだ。リルを見て細めていた目を、そのあとはおいしそうな料理に向けて舌なめずりをしている。

「今日はねっ、おそとでっ取れたうさぎが、市場に出たのっ。おいしいよっ」

リルが元気に挨拶を返している。お外というのは都市部を囲む城壁の外側と言うことだろう。近くの朝市には、都市の外で漁師が獲った獲物が出ることがあり今日は兎があったのだろう。リルも仕入れについて行ったのかもしれない。

「リル、今日の昼ご飯は兎のほかには何があるの？」

この世界では、貴族以外は概して識字率が高くない。商人はともかく、傭兵やハンターなどを相手にする店では、メニューをおいても意味をなさないため、何があるのかは聞くしかない。

「兎と、いつもの鯉だよっ」

いつものと言われても私はここで食べるのは初めてだ。と、マーヤが補足して教えてくれる。

「都の北にローランディア湖って湖があるでしょう？そこで鯉が獲れるらしいわよ」

地元の名産なのだろうか。そういえば自宅でも魚といえば鯉の料理ばかりだ。

「兎を一皿もらえるかしら。あと鯉の小さいのない？」

大人の二人前を取ると、食べきれなくなるから、兎と小さめの鯉をもらって二人で分けることにする。

やがて、香辛料の利いた兎肉のグリルと、香草で香りづけされた蒸した鯉が出てきた。

「よお、ライラ先生お待ちどう。いつも良い酵母くれるお礼だ、鯉の分のお代はいいぜ。」

「あら、ありがとう、それにおいしそうね。でもお昼から今日獲れた肉なんか出して、夜は大丈夫なの？」

ライラが、料理を運んできたグンデさんに尋ねる。こういう酒場の本番は商人や傭兵相手の夜のはずだ。すると、忌々しげにグンデさんが応えた。

「今日は商人もハンターも街に入れない見たいでよ。夜は閉めようと思ってるんだ」

「入れない？」

「ああ、なんでもどっかの国からすげえ人数で偉いさんが来るらしくてよ、街道が封鎖されちまったんだと」

グンデさんが話していると、先ほどの傭兵風の男が話しかけてき

た。

「おう、その話なんだがな、ライラ先生よう、あんた、若くて腕のいい治癒師知らねえか？壁の外まで来てくれるような」

私は思わずライラの方を見た。グンデさんもライラを見ていた。ライラは、みんなの視線を受けて苦笑して言った。

「……おばあちゃんでもよければ、とりあえず話を聞きましょうか」

ライラの口調が冷たい。若くないと見なされたことが気に食わない様子だ。その怖い笑顔が自分に向けられていなないことにほっとする。

リルが、場の雰囲気が変わったことについていけず、不安そうにグンデさんにしがみついていた。

◆　◆

結局、ライラがその傭兵風の男、ジノさんについて行くことになった。

彼は隣の都市ムステルドからの商人を護衛してきたのだそうだ。無事に旅をほぼ終え、王都に入る前に、商人の連れが病気になったらしい。普段は風邪程度では都市の城門で止められたりはしないなので気にせずに都市に入ろうとしたのだが、なぜか今回に限って、門番が普段では絶対にないような厳重さで商隊を調べ、その過程で病人が発見されてしまった。そのため、治癒者を連れて来るための一人を除いて都市への立ち入りを禁じられてしまったらしい。

「いやあ、俺が知ってる治癒師っつったらライラさんしか居ねえし、この町からライラさん連れ出したら、治癒師居なくなるだろ？困っちまってたんだよ。商人の連れってのもただの風邪で大した病気でもなさそうだし、わざわざライラさんが来てくれるとも思わなかったんだが、いや、助かった」

ライラが若くないと言うわけではない、と苦しい弁明をしている。

「風邪を甘く見ないで。」

短く冷たい返事。本気で怒ってる訳ではないのだろうが、二度と年寄り扱いさせない、という強い意志を感じる。冷たい口調にうろたえているジノさんが気の毒になる。

「マーヤ、今日は送っていけそうにないから、あなたのお父さんに連絡しておくわ。仕事が終わったら寄ってくれるでしょう。それまでお留守番お願いね。薬を取りに来る患者さんには処方したものは渡してあげて。明日はお休みにしましょう。」

残念ながら、私はもちろん付いてはいけない。精神的なものがどうあれ私は6歳の子供の力以上のものは持っていない。治癒の力を仕えるのならまた違ったのかもしれないが。

いや、冷静に考えれば、そうであっても6歳の子供を連れて行くことはないはずだ。プラナが見えないことで、少し卑屈になっているのかもしれない。

「おいおい、ライラさん。マーヤちゃん、うちで預かるぜ。お父さんにはうちに来るように連絡出来ねえのか？」

グンデさんが親切に申し出てくれる。父が宮廷魔術師で末席とはいえ貴族だというのは治療院に関わる人には伝えていない。伝えるたうえでもフラットに付き合ってくれる人は数えるばかりだろうから。グンデさんも迎えに来るのがまさか宮廷魔術師だとは思っていないから気楽に申し出てくれるのだろう。

「患者さんが薬をとりに来るし、誰か院にいないとまずいのよ。マーヤならしっかりしてるから大丈夫よ。この子のお父さんも暗くなる前には迎えに来ると思うわ」

ライラが言っている理由は本当のことだ。それに、酒場のなかをふわふわと漂っているスリヤも、しばらくは一緒にいてくれるだろうから、問題はないのだ。

「わかったよ。ちょっと心配だがコリンにちょくちょく様子見に行かせらぁ。マーヤちゃんよ、困ったことが有ったらすぐに知らせるんだぞ。このあたりの連中ならみんな助けてくれらぁ」

「ありがとうございます。何かあったらお隣の服屋さんに駆け込みます」

ぺこりと頭を下げてお礼を言っておく。

「いやぁ、確かにしっかりしてるなぁ。本当にうちのリルより年下とはおもえないねぇ」

グンデさんが呆気にとられていたようだが、とにかくライラが壁の外へ向かい、私は院で父が迎えに来るまでスリヤに守ってもらいながら留守番と決まった。

『スリヤ、少しの間一緒にいてくれるかしら。お願い』

『まったく、しょうがないねぇ。まあ、なんか嫌な予感もするし、あんたのお父さんが迎えに来るまでくらいは一緒にいてやるよ。』

『ありがとう、スリヤ』

ライラとジノさんと連れ立って一旦、院に戻る途中で念のため一応、お願いの形でスリヤに念話を送ると、恩着せがましい回答が返ってきた。スリヤが私の周りに姿を現すのはいつも暇な時で、今回だって他に大した用事などないはずなのだ。とはいえ守って貰えるのは心強いので、恩に着ておく。

……そうこうするうちに、治療院に到着し、ライラは隣の服屋さんのモリーさんに留守にすることを伝え、外に行くための準備を始めた。ライラは治癒魔術が使えるが、それに頼り切るのは危険だ。治癒の魔力は患者の本来もつ治癒力を底上げするもので、患者のほうに治癒するだけの余力がない場合、薬等で補ってやらなければいけない。

「で、患者の年齢と症状は？」

「おお、患者はそこのお嬢ちゃんと同じくらいの子供で、あと、ああ熱がちょっと高いくらいだな」

なんてことだ。ジノさんの悠長さに流されていた。これを先に聞いておくべきだった。ライラも顔をしかめている。６歳の子供の熱は侮るわけにいかない。子供は体温調節が大人の様にはいかないので、発熱の原因が何であれ対応を間違っていると思わぬ高熱になっ

て、下手をすれば命に係わる。子供にとっては隣の都市からの馬車移動は長旅で、体力も落ちていると思われる。

「急ぐわよ、ジノ。早く案内して。マーヤ、後は任せたわ」

ライラは、きちんと整理して持っていくのをあきらめ、手当たり次第に大きめの鞄に詰め込んで歩き始める。

「いってらっしゃい。後は任せて。」

ライラが、後のこと気にせずに子供の治療に専念できることを願いながら、手を振って送り出した。

ジノさんが慌てたようにライラについて行き、ライラの鞄を引き受けて足早に案内をはじめる。間に合ってくれればいいのだが。

◆　◆

ライラが行ってしまい、治療院に一人になった。スリヤは傍にいるのだが。

『ライラったら、カイルにあんたのお迎え頼むの忘れてるじゃないの。』

ライラは、プラナを利用する治癒魔法は使えるが、遠話などのマナを使った、自然魔法などともいわれる普通の魔法は使えない。だから、遠話をする場合は専用の魔法陣を使ったとしても、私のようなマナを制御できる人間が手助けする必要がある。私の自宅に連絡するつもりだったのか、それとも王宮に連絡するつもりだったのか、どちらにしても、すでに出かけてしまったのでは連絡は不可能だ。

「スリヤ、お父様に迎えに来るように言ってきてもらえる？」

「無理よ。王城ってものすごく強力な魔法結界が貼ってあるんだもの。あの結界の中に許可なく入れるのは神様クラスだけ。」

なんと。そんな結界があるとは。驚いているとスリヤがさらにかぶせてくる。

「あの結界張って維持してるのってあんたの父親の仕事だよ。もちろん一人でやってるわけじゃないけどね。」

辺境出身の魔法使いが宮廷魔術師に召し抱えらたうえに準男爵とはいえ貴族に列せられたのは伊達じゃないってことかな。

「そんなところによく遠話が通るわね。あの魔法陣ってものすごく特殊なのかしら。」

父がまた入り組んだ魔法を組んでいるのかもしれない。そんな特殊な魔法陣を、今の私の知識で勝手に使うのは、遠慮したい。ライラはよくまあ、こともなげに使っていたものだ。

「……しょうがないわね、お母様は遠話できないし、お父様が王城から出てくる頃を見計らって、私が遠話で連絡しましょう。」

結界がなければ、私から父への遠話は可能だと思う。やってみなければ分からないが。

と、治療院の表から声がした。

「おーいせんせー。薬貰いにきたっすよーー」

これを皮切りに、薬をもらいに来る人もいれば、軽いけがをした人が治療を求めてもきた。

ライラがいないのに治療していいのか。前世であれば明らかに否だ。

しかし、今世で私は看護師をしたいわけではない。治癒を自分で行える人間になりたいのだ。そして目の前には患者がいて治療を待っているのだ。そこに、躊躇も葛藤もなかった。わたしは、ライラが不在で治癒魔術が仕えないことを謝罪しつつ、簡単な傷に消毒をしたり、打身に湿布を貼ったりをこなしていった。そして改めて確信していた。治癒の魔法が使えなくても、人を治療する技術はある。それで助かる人たちがいる。

――だから私は、絶対治癒者になる。もう、そう決めている。

慣れない治療用具や薬剤と小さな体に戸惑いながら、決して効率は良くないが、きちんと患者に対応していった。患者も小さな子供に治癒を任せるのに不安をにじませながらも、わたしの手つきを見て安心してくれたのか、大半の人が治療を任せてくれる。とはいえ、私の治療でお金をもらうわけにもいかないので、会計は薬代だけをもらうことにした。

そのうちに日が暮れてきて、患者もようやく途切れた。今日、薬をとりに来る予定の人にはとっくに全員渡している。

「なんか忙しかったわね。つかれちゃった」

「でもマーヤったら楽しそうだったねぇ。そろそろあんたの父親に連絡するころあいじゃないかい？」

「そうね、一回遠話をつないでみる。でもその前に、終了の札出してくるね」

治療院の入り口をでて、診察終了の札を出そうとした時――

口調は大人びていて、でも明らかに声変わりする前の高い声で、声がかけられた。

「治療院はまだ開いてますか？」

――あら、きれいな男の子ね。

それが、私の第一印象だった。

3．（後書き）

なんか最後だけいきなり視点が未来からになっていたので修正しました。

4.

目の前にいる少年は、襤褸としか言いようのない服を着て、古びた袋をもっている。恰好だけをみると、なんだか、只のみすぼらしい浮浪少年だ。その腰に体に似合わぬ剣を下げていることと、その美しすぎる容貌を除けば。

まだ幼い私の目線はその少年の胸の高さから見上げる形になり、そこから顔を上に向けている。少しの間、見とれる、というより呆気にとられて黙っていると、当の美少年が、その碧がかったグレーの目をすこし曇らせて、すまなさそうな顔をすると、腰を屈めて目の高さを私と同じに合わせて、もう一度言う。

「ねえ、治療院はまだやってるか？」

口調から幾分大人びた感じが消えて、子供相手の話し方になっている。見上げる必要もなくなって首が痛くないのは助かる。服は襤褸をまとっているが、中身は子供なのに紳士だ。

「今、閉めようとしたところよ。」

自分の甲高い声が気に障る。前世で５０年生きて、今世ではまだ６年。どちらの年齢を考えても、恋愛を意識するのはおかしいと思うのだが、桁違いな美貌というのは、そういうのを超えて体温を上げるものらしい。まぁ、眼福ではある。

「あらら、先生にちょっと怪我を見てくれるように頼んでくれるか？」

顔をしかめるのすら様になる。前世に連れて帰ったらスターになりそうだ。

「怪我をしてるの？」

「大したことはないんだけど、うち身と擦り傷がちょっと」

「治癒師は今、居ないから代理の治療になるけどいい？」

追い返すのも寝覚めが悪そうだ。結局、彼を治療室に通すことにした。表の札はＣｌｏｓｅｄにしておく。

『おや、またえらく襤褸っちい子だねぇ。っと。ほぉっ、顔はえらくきれいじゃないか。それに…。ただもんじゃないよ、この子』

『詮索は後よ。怪我してるって言うから治療するわ』

彼を治療用の寝台に座らせて、スリヤをだまらせる。

「じゃぁ、怪我してるところを見せて。」

「えっ？代理の治療師は？」

「私よ」

案の定、驚いたようだ。きょとんとした、意味がわからないという顔から、徐々に目を丸くしていく。

「ええっ？本当に？大丈夫かい？」

「つべこべ言わずに傷を見せて。」

強引に治療を始める。手や脚のそこかしこに擦り傷があるし、うち身は体中にある。６歳の子供の体での治療にも、今日一日でかなり慣れたので、傷口に薬を塗ったり、打撲の場所を調べて湿布を貼ったりしていくのも苦にはならなくなっている。

「はい。終ったわよ。」

そういうと、少年はちょっと目をすがめて、私の方を見てから不思議そうに聞いた。

「あれ、治癒魔術使わないの？」

いまさら何を。治癒魔術使うならこんなに薬品要らないでしょうに。

「私は使えないの。」

「使えない？あれ、でも……」

何かを言いかけた、その時、治療院のそこから騒がしく誰かが入ってきた。

「マーヤ！！居るのか！！無事か！！」

……しまった。父に連絡を取るのをすっかり忘れていた。確かにいつもなら家に帰っているか遅くなるならライラから連絡があるはずの時間だ。いまだに親バカな父が心配するのは当たり前だろう。慌ただしく治療室に入ってきた父に、頭を下げる。

「ごめんなさい、お父様。連絡をするのを忘れてたわ。でも、治療室にそんなに騒がしく入ってきてはいけません」

一応、釘をさす。父は何か言い返そうとして口を開き、そのまま目を見開いて固まった。視線の先には患者の少年がいる。見ようによっては一つの部屋に男女が二人きりだが、さすがに患者相手には、この父でさえそんなことは思わないだろう、いや思わないでいてほしい。

しかし父の驚きは全然違うものだったようだ。気を取り直したあと、少し冷たい平板な声で少年に話しかける。

「おや、マーク様じゃないですか？……マルケニア伯爵のご子息ともあろう方が、このような場所で湿布まみれになっているのは、一体どのような理由があるのでしょうか」

父のこんな声は、私はあまり聞くことがない。弟が悪さをするときはこの調子でたまに叱ることがある。子供を躾けるとき用の声なのかもしれない。子供には利きすぎる気もする、そんな声だ。

しかし、相手の少年は気にもしないようににっこりと笑った。

「おや？アストリウス殿じゃないですか。このお嬢さんのお父上？それはまた奇遇ですね。」

「あなたは今日は、一日中ストイコ殿下と共に過ごされるという予定だったはずですが、王宮にいるはずのあなたが何故ここに？」

王太子の次男の付き人のようなものをまかされてる、伯爵家の息

子、というのが彼の正体のようだ。

「その襤褸を見れば、なにかまた無茶なことをしでかしている、というところでしょうか」

マークと言うらしいその少年は、笑って肩をすくめた。なかなか豪胆だ。

「いやぁ、名高い宮廷魔術師アストリウス殿のお嬢さんが、６歳にしてこんなに美しく、しかも聡明な治療師をしているとは全く知りませんでしたよ」

「話を逸らさないでください。まったく、１２歳の子供はおとなしく守られていなさい。あなたの出る幕ではない」

１２歳なのか。外見通りなのだけど、発言が１２歳のものとは思えない。声を少し大きくして叱る父になだめるように言う。

「そんな大声出すと、マーヤさんが怯えちゃいますよ。落ち着いてください。」

――何をしたのかは知らないが、反省は全くしていないようだ。

「誰のせいで大声を出してると思うのですか！それに気軽にうちの娘の名前を呼ばないでいただきたい！」

切りがなさそうなので、口をはさむことにした。

「お父様、話はうちに帰ってからにしませんか。マーク様、夕食をご一緒にいかがですか？父もお話があるようですし」

「えっ」

一瞬、マークの顔に焦りが浮かんだ。なんだかんだと言って父を煙に巻いて逃げだすつもりだったのだろう。そこに私が夕食に誘ったので、逃げられなくなったのだ。このひねくれていそうだが、礼儀正しい少年が、6歳とはいえ、レディからの誘いは無碍にしないだろうと読んでのことだ。

「思わぬ伏兵だ」

そう呟きながらもマークはにっこりと笑って私の方を向いて立ちあがり、優雅に一礼した。襤褸服でなければさぞ鑑賞に堪えただろうと思える礼だった。

「喜んで。お嬢さん。しかしこのような服でうかがうのは申し訳ない。一応きちんとした服も持っているのですが、すっかり濡れてしまっているのですよ」

そう言って持っていた古い袋から服を出して見せる。確かにびしょぬれだ。

「まぁ、大変。すぐに乾かさないと」

服をマークの手からもぎ取り、念じる。

《脱水》《乾燥》《渦巻》

まずは水の魔法で脱水すると、暖かい風が服を舞いあげて、空中でぐるぐる回る。イメージは前世でよくお世話になった全自動洗濯

機の脱水から乾燥だ。この魔法、治療院でよく使うタオルや包帯を洗った後に重宝している。

5分もすれば、服も乾いたようだ。魔法を止めて、服を受け止めると、マークに渡す。

「更衣室があっちにあるから着替えてきてください」

「魔法が使えるのか、びっくりしたよ」

驚いた口調で言う。魔術師の娘が魔法と使ってもそんなに驚くことではないと思うのだが。

……その時。

「何言ってるんだい、あんただって魔法使えるだろ」

いきなりスリヤが姿を現した。

「え、本当？」

驚いて私がスリヤに聞く。

「この子の周りを視て御覧。火の性質のマナが吸い寄せられるように集まってるよ。火の魔法にかなり相性がよさそうだ」

へえと思い、目を凝らしてマークを眺めると、確かにマナが集まっているのが見える。

「……今度は精霊かあ、さすがにアウトリウス殿のお嬢さんとい

うべきかな、驚かせてくれますね」

火の魔法を使えることは否定する気もないようだ。

「マーク様、さっさと着替えてきてください。今日は我が家できちんとお話をさせていただきますよ。」

父が焦れたように促すと、ようやく更衣室にむかって行った。その姿が見えなくなると、ため息をついてから父が聞いてくる。

「マーヤ、一体どういうことなんだい？お祖母様もいないようだし」

……ようやく、父に今日あったことを一から、全て話すことができた。そして日が高いうちに、スリヤと一緒に帰ってこなかったことについて、こってりと叱られた。

5.

「お待たせしました」

着替えたマークが戻ってきた。そろそろお説教が辛くなってきていたところで、ちょうどいい。子を心配する親の気持ちは、前世で実体験として知っている分、自分が心配される側に回ると反論も出来ないし、結構つらいのだ。

着替えてきたマークは、貴族の着る瀟洒（しょうしゃ）な服に身を包んでいた。そういう格好をすると、マークの美しさがますます引き立ち、立ち居振る舞いが大人のようにあか抜けていることと相まってか、まるで男装の麗人――宝塚の舞台を見ているような錯覚をする。このまま行くと将来は宮廷で多くの美姫達の心を奪い、争いのもとになるのではないだろうか。いろんな人に恨まれそうだ。まぁまだ１２歳なので、顔の造作などはまだ固まってはいない。ものすごい美少年が、成長につれて男臭い顔になってなんとも中途半端になることもよくあるし。

などと、少しの間だが場違いなことを考えていた。すると、マークがこちらにその笑顔を向けていった。

「マーヤさん、治療費を渡したいんだけど、これしか持ち合わせがなくて」

と言って取り出したのは虹色に輝く硬貨。魔石貨だ。

「おやまぁ。なんてものを出すんだい」

スリヤが私の気持ちを代弁してくれた。魔石貨一枚というのは、それほどの大金である。

この世界での一般的なお金は金貨、銀貨、銅貨だが、それらは基本的にすべて補助貨幣だ。前世でいう金本位制に対比していえば、この世界は魔力本位制になる。各国が発行する一番大きな貨幣は、大きな魔力を使ってマナを凝縮して、それぞれの国で魔法の刻印をつけた魔石貨が一般的だ。魔石貨一枚で一般的な魔法使いが1か月働く程度の魔力が込められている。王都で町人がつつましく暮らすなら2か月は暮らせる金額になる。虹色はファランク王国の魔石貨の特徴だ。

「お待ちくださいな。魔石貨ですと金額が大きすぎますわ。とてもこちらではおつりがお渡しできません。それに魔石貨ですと、下町では使えませんので、お代はまたいずれということで如何でしょうか」

マークの言葉が慇懃だったので、少し口調を改めて抗弁する。魔石貨なんてもらっても持て余すだけだ。

「じゃぁ、こうしましょう。このお金はマーヤさんへの前払いです。今後、この対価の分が尽きるまでは無料で治療していただきましょう」

口調の割に言ってることが強引だが、治療費の払い方自体はそんなにおかしなものではない。ハンターや傭兵は始終怪我をしているものなので、治療費をそのたびに払うことはせず、前払いで一定期間は何回でも治療する形にしている。怪我でボロボロになった時は治療費も持っていないことが多い、という事情もあるのだが。ただし、一般的に金貨一枚で４週間程度だ。魔石貨だと４０週分にもな

る。それに――

「前払いについても、祖母の許可がなければ、私の一存ではお受け出来ないです」

「いえ、前払いはこの治療院にではなく、マーヤさんにお渡ししたいんですよ。先ほどの治療の手際は見事でした。」

――またおかしなことを。傭兵たちが前払いで治療費を払うのは、いざというときには切れた腕や脚すら繋いでしまう、治癒魔術があるからで、治癒魔術を使えないわたしにそんな大金払って何をしようというのだ。

「娘を誑かそうとするのは今すぐ止めていただきたいですね。治療費は不要ですから、私のいないところで娘の前に顔をだすのは今後一切ご遠慮願いたい。いやそれより、今後もけがをするような行動を起こすおつもりですか。」

父の口調がものすごく冷たい。相手は伯爵家の人なんだけど、意に介してもいない様子だ。なのに、対する12歳の少年はそれにあっけらかんと応える。

「殿下をお守りするための行動ですから、少々の怪我など恐れていられませんよ」

「……あなたの怪我を心配したわけじゃないのですが……ああ、もういいです、うちに向かいましょう。」

疲れたようにそう言って、話を打ち切った。

父に追い立てられるようにして治療院を出て辻馬車を探すことになった。

「暗くなってしまったな」

父は空を見上げてそう言った。すでに日は落ちているが星明りが明るく、私には然程暗く感じない。

この世界では空のかなりの大きさを天の川がおおっている。天の川は、前世で見たものの倍くらいの幅で、明るさも強いような気がする。そして地球のものの様な大きな月も存在しない。非常に小さく星と変わらないように見える月は二つあるが、月明かりで明るくなるようなほどではなく、天の川のほうが余程明るい。私は天文学のことはよく分からないが、このことは魔法の存在とともに、ここが少なくとも地球上じゃないことを認識させてくれる。

治療院の傍で客待ちをしていた辻馬車を拾って我が家へ向かう。みすぼらしくはあるが、車内は清潔にしていて、まずまず快適だ。車内の会話がほとんどないので、座って大人しくしてる以外何もすることがないので、快適かどうかは重要だ。

「それにしても、マーヤさんは6歳とは思えない。しっかりしているというより、大人びてますね。本当に6歳とは思えないですよ」

沈黙に耐えかねたのか、マークが当たり障りのない話を始める。

「何を言ってるんですか。私はあなたの6歳のころを知っているのですよ。あなたは6歳で既に大の大人に交じって剣の鍛錬をしていたではないですか。マーヤは妻に似て賢いだけです。あなた程人間離れしてません」

マークって、一体どんな子供なんだ？にしても父は、私については『母に似て賢い』で納得して受け入れてるのか？

「子供が遊びで交ぜて貰っていただけですよ」

マークが謙遜した。

「その遊びの延長でいろんな所に首を突っ込んで、殿下を狙った暗殺者を退治したのが8歳のころでしたっけ。まぁ、あなたについて心配しても無駄な気がしますが、殿下はあなたが大層お気に入りです。殿下が気をもむようなまねはやめてもらいたいですね」

「おっとそうきましたか。……その話は後にしましょうよ」

褒めるのかと思った父からの厳しい言葉に首をすくめつつ、御者の方を気にして声を小さくする。

「彼には聞こえはしませんよ。……まあ、いいでしょう。後でじっくり話を聞きます」

……家に着けば、じっくりと話ができるだろうという父の目論見は、しかし、見事に外れた。

馬車を降りると、玄関では私のことを心配した母がそわそわとしながら待っていた。

「マーヤちゃん。大丈夫なの？何があったの？お祖母様はどうしたのかしら」

「お母様。連絡できなくてごめんなさい。ライラは壁の外に行ったんです。」

「ええ！どういうこと？」

――話が長くなりそう。

少しだけ、電話がないこの世界をのろいたくなった。電話で話していさえすればこんな事になってない気がする。父と辺境にいる祖父をたきつけて、誰でも使える物を作ってもらおうかな。お父様が来たときに、入れ替わりで、スリヤに母への伝言を頼めばよかった。そのスリヤは、さっさと家の中に入っている。最近彼女は私の弟妹がお気に入りで、よく遊び相手をしている。

「失礼します。アストリウス様の奥様。マーク＝マルケニアと申します。突然で申し訳ないですが、アストリウス様のお招きをいただきまして、お邪魔することになりました。マーヤさんのお話にもかかわるので、お話は後でゆっくりということにいたしませんか。」

マークがまたもや助け舟を出してくれた。そちらを見たとたん、母の顔に、ぱっと華やかな笑顔が浮かんだ。

「あらあら、お客様？え、マルケニアって伯爵様のご子息様？まぁなんてかわいい方なんでしょう！いやだわ、あらまぁ、お入りください」

――お母様、混乱して地が出てますよ。マークは貴族風の対応を求めるようなタイプじゃなさそうだから問題はないですけど。

マークは花も恥らうような笑みを浮かべて会釈する。

「ありがとうございます。それではお邪魔します」

礼儀正しくかわいらしい客に、食事を振舞ってご機嫌な母の気分を害するのが、嫌だったのか、食事中は父からマークへの質問というか詰問はなく、礼儀正しく食事を褒めるマークや、にぎやかに食事をする双子の弟妹、サイリースとシェイラの相手をしながら平和な時間が過ぎた。

「マーヤさんは6歳で見事な魔法を使うんですね。さすがはアストリウス様のご息女。それにしても魔法で行う衣服の乾燥というのはもっと時間のかかるものだと思っていました。私は、干すよりも早く乾燥できる魔法なんてほかに見たことがないです」

魔法の話はあまり触れてほしくなかった。わたしは父から正式には魔法を学んでいないのだ。

「あれ、マーヤちゃん、そんな魔法使えるの？あなた、そんなの教えた？」

母は私の魔法は初歩レベルだと思っている。私が父の蔵書を読んである程度の知識を得ていることは知っているが、子供の手慰み程度だと思っているはずだ。しかし私がよく使う、風の魔法と火の魔法を組み合わせでものを乾燥させるような複合魔法は、かなり高度な魔法に分類されるらしい。

「いや、私も始めてみた魔法だった。マーヤのオリジナルなんじゃないかな？」

父の態度は淡々としたものだったので、素直に頷く。オリジナル

魔法を娘が使っても驚いてないのが不思議だ。

「はい、風と火の魔法を組み合わせて適度な熱風を服に当てる魔法です。マナの消費を抑えるために風を渦にしました」

父が嬉しそうにうなずく。

「うん。マーヤが我が家の魔法の基本知識を身に着けてるのはわかっていたよ。お前はサーヤによく似て本当に賢い。あとは発想だからね。あれは水の魔法も使ってただろう？」

――さすが宮廷魔術師。

「はい、さっきは急いでたので、衣服から水分を取り出すのに水の魔法も混ぜてみました。あんまりうまくいかなかった感じですけど」

そう答えた途端、なんだか食卓が沈黙に包まれた。

――なんかおかしなことを言っちゃったのかな……

父は満足そうに頷いているだけだが、母もマークも呆気にとられたような顔をしている。

「……驚いたな、6歳でオリジナル魔法ですか。しかも3種類の組合せ魔法なんて……今からでも宮廷魔術師になれそうですね」

なんか変な雲行きだ。私は治癒者になるつもりなのだ。父は一代限りの準男爵で、私や母には貴族の義務はない。王宮で偉い人のご機嫌をとるなら、その間に一人でも多くの人の怪我や病気を治した

い。

「マーヤちゃんすごいわ！その魔法教えて！私にも使える？」

――お母様、そちらですか。

母は衣服が速く乾くことのほうが重要なのかもしれない。常駐の使用人がいない我が家では家事のほとんどが母に掛かっている。さすがに忙しいのだろう。たまには弟妹の子守をやってあげようと思う。

「お母様は風と水が得意なんですよね？組み合わせればできると思いますけど……。お父様、お母様に作ってあげてもらえないですか？　私の魔力だと水だけは無理です」

私の魔力は父や母に比べて小さいので、３つ使わないといけなかったが、母なら風や水だけでもできるかもしれない。ただ、私にはそのほうが難しい気がするので、父に任せたい。それに私は乾燥の魔法を極めるよりも、まだ使うきっかけすらないが治癒魔術を使えるようになりたい。

「マーヤはまだ６歳だからね。それでもかなり大きな魔力なんだけどね。これから大きくなっていくよ」

――あれ？

「お父様、魔力って増えるんですか？」

「え？ああ、もちろん使っていれば増えるよ。」

てっきり魔力は変わらないものだと思っていた。私はマナを知覚できるし、いろいろ試して、知覚できる範囲のマナから得られる力の、かなり上限を使っていると思っていたのだが。

「知覚できるマナがどんどん増えていくのよ。私も結婚してから知ったの」

「ああ、魔術師として教育を受ければ知ってるもんだが、ちょっとマーヤの知識は偏ってるかな。」

母と父が説明してくれた。魔術を習いたての頃は、知覚しやすいマナしか知覚できないが、使い続けることで知覚しにくいマナも見えてくるらしい。そうなると使える魔力が何倍にもなるのだ。

「プラナも？」

一番気になることを聞いてみた。プラナが見えるなら私が治癒術者になるのに障害はなくなる。

……途端に父の歯切れが悪くなる。

「プラナについては、よくわからないことが多いんだ。」

「プラナに関しての情報って治癒者が口伝で伝えるものと神殿の秘術くらいしかありませんからね。」

マークが口をはさんだ。

「でも、プラナも鍛えれば見えるようになるはずですよ。神官全員が治癒者の能力持ってるわけじゃないですけど、神殿の除霊術っ

てプラナ使わないといけないはずですし。」

「本当に！？私にも見えるようになる？」

「ええ、自分の体内のプラナを操れるのに見えないっていうのは珍しいと思いますが、たぶん大丈夫ですよ」

「ほう、それはすごい。」

父が感心したように言うのだが、また口調が冷たい。

「それはわたしも知らなかった話だ。神殿の秘儀だと思うのですが、なぜご存じなのか、ゆっくり話を聞かせていただいていいでしょうか」

……父に根掘り葉掘り聞かれ、マークは神殿に忍び込んだ話やら何やらを顔を白黒させながら白状し始めた。それを尻目に見ながら、私は母に連れられて寝室に向かった。そして上機嫌のまま眠りについた。

――明日からはもっと真剣にプラナを整える練習をしよう。

6.

翌朝の目覚めは快適だった。

――プラナが見えるようになるかもしれない。

治癒の術を使う上で最大の障害だったものが、自分の鍛錬次第で克服出来る可能性がある。視えなくても、治癒魔術が使えなくても治癒者になる覚悟はしたが、治せるものが違いすぎる。

治癒魔術が使える。そのことに希望が持てたからか、昨夜は本当にぐっすり眠れた気がする。

「おはようマーヤ、今朝はご機嫌じゃないか」

着替えていると、スリヤが声をかけてくる。昨夜は双子が寝るまで相手をしていたようだが、疲れは見えない。そう言えば、精霊って眠るのだろうか。

「おはよう、スリヤ。ええ、機嫌はいいわよ。だって、練習次第でプラナって見える様になるかもって。マークさんが知っていたのよ」

返事をしながら、自室を出て浴室へ向かう。声が心なしか、少し弾んでいたようにも思える。まあ、まずさっさと顔を洗おう。

「へえ、プラナが視えるようになるかもってことかい？練習で？」

「ええ、そうよ」

「なんであの子がそんなこと知ってるんだい」

「そうね、なんだか神殿の秘術らしいけど、マークが何故だか知ってたの。どうもかなり危ないことしてたみたいだけど、私眠くてちゃんと聞けてなかった。夕べお父様が問い質してたから、正確なことはお父様に聞こうと思うの」

スリヤは納得いかなさそうな顔をしている。

「ライラやカイルが知らなくて、あの子が知ってるってのは変じゃないかい？」

「まぁ、いいのよ。どうやって知ったかなんて。駄目で元々だし、どっちにしろ私は治癒者として働くつもりなんだもの。」

「ふーん、まあ、あんたが納得してるなら、それで良いよ」

身だしなみを整えても、朝ご飯までには、まだ一時間程度の時間がある。いつもこの時間は庭に出て、マナを使った自然魔法の練習とプラナの感じる練習をしている。今日からはプラナを感じるのに時間を割こう、と思いながら芝生が敷かれた庭に出た。

まずはスリヤに手伝ってもらいながら簡単にマナの制御の練習をする。治療に自然魔法を役立てる方法をいろいろ探ってるのだが、上手くいかないときにスリヤにフォローしてもらっている。私は自然魔法も使えるのだから、その力を無駄にする必要はない。今のところ包帯の乾燥のようなことしか、できてないのだけど。

「今日はこのくらいで良いかな」

「おや、いつもより短いね。良いのかい。特に成果が出たってわけでもないのにさ」

スリヤが怪訝そうに聞いてくる。

「うん。ちょっとプラナを感じる練習を長めにしようと思って」

「……分ったよ。納得するまでおやり。私はプラナってやつが視えないから手伝えないけどね」

「うん。手伝ってくれてありがとうね。プラナは集中するだけだから、手伝いは要らないと思うよ」

スリヤに話しながら庭のベンチに腰掛けて、緊張をほぐす。そして意識を体内に満ちるプラナを感じることに向ける。

この練習を始めた時は、感覚がおぼろげで、本当にプラナを感じているのか、私の錯覚なのかの判断もつかなかったのだが、最近は、これがプラナだと確信できるようになっている。

体の隅々のプラナをチェックして、体調をチェックする。最近は、プラナから伝わる感覚でなんとなく体調がわかるようになっている。自然魔法の練習中、いつも立っているせいか足が疲れるのは毎度のことだ。足に感じるプラナに力を込めるようにすると、足の血行が良くなり、疲れがほぐれてくる。うん、ちゃんとできてる。

「へえ、きれいなプラナの制御だ。」

マークの声がした。

私は、全然気付いていなかったので、驚いて声の方を向き少し非難するような眼差しを向ける。

「おっと、失礼しました、マーヤさん。訓練の邪魔をしてしまったようですね」

マークが口調を改めたが、それを気にする余裕はない。

「視えるの？プラナが」

驚きのため、言葉使いが乱れた。なので言い直す。

「マーク様、あなたにはプラナが視えるのですか？」

「口調はさっきのフランクな方がいいなあ。」

――そんな話はどうでもいい。

「あなたがプラナが視える治癒者なら、何故わざわざ治療院に来たのですか？」

「プラナが見えるといっても治癒者とは限らないんだよ。昨日も神官は全員が治癒者じゃないって言ったの覚えてる？」

眠くて聞き流してた気がするが、今思い出した。軽く頷く。

「プラナってのは大半の人が訓練次第で視えるようになるんだよ。マナは特別な才能がないと無理なんだけどね。」

「訓練次第で誰でも？でもプラナを扱えるのは特殊技能で、治癒術者か、神官だけだって。」

少し混乱した頭で反論する。

「あ、視るだけなら、だよ。あと、除霊術も。訓練さえ積めばね。でもプラナで治癒するのは多分、生まれた時の素質が必要。そんなことより、敬語やめようよ。昨日も初めは敬語なんて使ってなかったんだし」

――伯爵家の息子が何をばかなことを。

父はそれでも貴族の端くれだが、それは父だけの一代限りのもので、他の家族は只の平民なのだ。マークが貴族であることを知らなかった頃ならともかく、知った今そのままの口調で良いわけがない。

「貴族であるあなたのことを、敬称なしに呼んでいるのを、他人に聞かれたりしたら、父が恥をかきます」

笑顔で即答が返ってくる。

「それではこうしよう。二人きりの時はお互い呼び捨てで、他人の前では礼儀正しくふるまえばいい」

――強引な。

人の悪そうな笑顔が、きれいな顔に似合っていない。

「そんなことをする理由がありません」

「6歳の女の子にしちゃ強情だなぁ。マーヤって本当にすごい。」
妙な感心の仕方をしながら、にやりと笑って続ける。
「うーん。じゃあさ、プラナが大半の人に訓練次第見えるって話の、訓練方法って知りたくない？」
「……どういうことでしょう」
「二人のときは敬称なしで呼ぶって約束してくれたら、教えてあげる。」
――本当に強引な子だなぁ。でも――
「それ、マークに何の得もないと思うんだけど、それでもいいの？」
「お、早速呼んでくれたね。二人きりの時にぎこちなくしゃべるのは嫌だし、教えるのは別に誰も文句は言わないから、大丈夫だよ」
本当だろうか。……私の知る限りこの世界で魔法の技術は、一族や徒弟の間でのみ、厳重に秘匿されながら継承されている。プラナの技も伯爵家の秘技だったりしないのだろうか。
「おやおや、私は数に入れてくれないのかい。お二人さん」
私が考えていると、スリヤがからかう様に声をかけてくる。
「スリヤさんか。無視したかのような物言いは無礼でしたね。ごめんなさい。でも、あなたは人間同士の細かな作法に、こだわった

りしないでしょう？」

「……私らに、累が及ばない限りはね。」

スリヤが皮肉っぽく言う。

「ちょっと待って。あなたの知ってる術って、部外者に教えて怒られたりしないの？」

私の逡巡の間に、どんどん進みそうになる話を、慌てて遮る。

「え、大丈夫だよ、ああ、もしかして伯爵家の秘術かもしれないと思ってるかな？違うから安心して」

――じゃあ誰に習ったの。

という問いは、マークの顔に一瞬浮かんだ翳りを見たせいで押しとどめられた。

「早速、始めようか」

さっきの翳りは見間違いだったかと思うような、華やかな笑みで宣言された。

◆　◆

「マーヤは、他の人のプラナは視えないけど、自分のプラナなら感じられるし、それを使って治癒もできるんだよね」

頷く。そんなに詳しく話してないと思うのだけど。

「じゃあまずは他人のプラナを視ることと、その次にそれを使うことが必要なんだよね」

これにも頷く。

「僕が視る限り、マーヤのプラナ制御は大人の神官と比べても遜色ないよ。あいにく治癒者は知らないけど」

「本当に？じゃぁ望みはありそうね」

「視えないのが却ってよかったのかも。視えるとどうしても目に頼りがちになるからね」

――痛しかゆしだ。

「じゃあまず、体中のプラナを認識する練習からしようか。」

マークの講義が始まった。スリヤは、自分が見えないプラナの話に退屈したのか、いつの間にかいなくなっている。自由で羨ましい。

マークが教えてくれたプラナの認識方法は一風変わっていて、なんとなくこの世界にそぐわない感じのするものだったが、私にとって妙に懐かしい感じのするものだった。

――これって座禅……？

正座をしたり脚を組んだりというわけではないのだけど、ベンチに腰かけて姿勢を正して、手のひらを上に向けて膝の上に乗せる。そして腹式呼吸。

「プラナが自分の体を螺旋を描くように活性化させてみて。背骨に沿って。ってわかるかな？」

――マークが手に棒とかもってたら、禅寺の修行みたいにみえるかも。もちろんマークは手ぶらだし私をたたくようなことはしなかった。

しかし、実際に言われたとおりにやってみると、なんだか体中のプラナが活性化したような感じがする。

「あらら、簡単にやっちゃうんだね」

マークがあきれたように言う。出来ているということだろう。毎朝、練習代わりに自分の体のメンテナンスをやっていることが、プラナの操作感覚を鍛えていたようだ。

「そのプラナを体内で動かしてみようか。」

――動かす？

体内に感じるプラナを活性化したりはしたことがあるけど、動かすなんてことはしたことがない。

「さっき活性化したルートにそって、プラナを動かすように意識してみてくれる？」

――と言われましても。

さすがにそんなことは簡単にできない。

「っと急ぎすぎたかな。いったん休憩しよう」

――急ぎすぎというかなんというか……

「プラナって体の中を自由に移動できるものなの？」

――今更だけど、プラナっていったい何？

ベンチに座り直しながら、その思いを口にする。

「何って？」

キョトンとした顔でこちらをみる。こういう顔をすると歳相応に見える。中身はどうやら相当にたちが悪い気がするのだが、綺麗な容姿がそれをごまかして余りある。

「体の中を障害なく動けるのに、体の外には出ていかない。人間の意志で活性化したり動いたり、何なのこれ」

「ちょっとまって。いきなり難しいこと聞くなぁ。マーヤの言ってること、僕が殆ど理解できないんだけど。なんで動けると変なの？そういうものってことでいいじゃないか。」

――本当に知らないのかなぁ。

「えーと、とりあえずプラナってのはそういうもんだから、体で覚えろって教えてくれた奴は言ってたんだけど」

「誰に習ったの？」

そう聞くと、マークの顔に先ほどと同じような翳りがちらりと覗く。しかし、すぐに人の悪い笑顔になって、

「秘密」

――もう、それ以上追求できないじゃないの。

私が肩をすくめると、マークが切り出した。

「プラナを動かす練習は毎日やってね。そうすればプラナが活性化しやすくなるのと、一か所に集めて体を強化したりできるようになる」

「強化って力が強くなったりするの？あまり興味ないわ。治癒者にはあんまり関係ないもの。」

「戦をするような力をつけようと思ったらそれなりの筋肉もいるし、マーヤには関係ないだろうけど、瞳を強化すると普通の視力だけじゃなくてプラナやマナを視る力も上がるよ」

「え、プラナも視えるようになるの？」

「視えるかどうかは、練習次第だと思うけど、少なくとも僕は視えてる」

「あなたってなんだか常識が当てはまらない気がするんだけど、私に出来るのかな」

この子は絶対に普通じゃない。ちょっと規格外だ。

「……君にそんなことを言われるとは。よそから見て、君のほうがいろいろ常識外れだと思うよ」

今度は本物の苦笑を浮かべて、声にも笑いが込められている。

――え、私客観的に見てこの子より変？

『……どっちもどっちさ。』

スリヤが念話で伝えてきた。考えてることが顔に出たらしい。……まあいいか。自分のことを偽るのとっくに諦めたんだしね。軽く肩をすくめて、不同意の仕草をするだけにしておく。

「じゃあ、瞳の周りのプラナを活性化してみてよ。それだけでも君が規格外かどうかわかるかもしれないよ」

――どういうこと？

「前にもやったことあるけど何も視えなかったわよ？」

と言いながら、プラナを活性化すると――視界が、色で、あふれた。

「う、わあ。なにこれ」

思わず目を両手で覆ってその場にしゃがみ込む。いつもよりもプラナの活性が強い気がしたのだが、それがこんな効果おを及ぼすとは思わなかった。

マークが焦ったように手を差し出しながら声をかけてくれる。

「え、あれ、大丈夫？そんなに強烈だった？」

どうやらマークの計算通りとはいかなかったようだ。

「うん、大丈夫。目の前が色とりどりになってびっくりしただけ」

「色とりどり？あ、そうかマナも鮮やかに見えるんだっけ。あー迂闊だった。マーヤは何種類もマナが見えるんだし、それはわかってたはずなのに。ごめんね、たぶん普段は見えない程度のマナも視えたんだと思う。プラナも視えてたと思うけど」

――確かに普段見ているマナに近い感覚のものだった。

「じゃぁ、この方法でプラナだけ視るって難しくない？マナが明るすぎてプラナが視えたかどうかすらわからないわ」

「僕も火のマナは見えるけど、たぶん君ほど感度が強くないんだろうね。プラナのほうがはっきり見えるから。うーん。なんか方法はあると思うんだけど、思いつかないや。ごめん、僕のほうで何かわからないか探ってみるよ」

本気で私にプラナを見せたいと思っているのがわかって嬉しい、のだけども。

「神殿に忍び込むのは禁止」

そのために神殿と伯爵家で悶着が起きたりしたら、なんだか困ったことになりそうだし。

それを聞いたマークは降参したように両手を上げて、ため息をついた。

「分かったよ。王宮図書館で調べるくらいにしておく。それはともかく、マーヤって自分の怪我を治す時はプラナを視てないよね？感じるだけ？」

「そりゃそうよ。みえないんだし」

――何を言い出すのだ。

「じゃぁ、感覚だけで他人の怪我って治せない？」

――へっ？

いきなりの話に思考が中断してると、両手がやわらかくマークの両手に包まれた。私の華奢な手と比べると、ずいぶんと大きくてたくましい手に見える。

「そのまま、つないだ手を通して僕のプラナって感じられないかな？」

「そんなこと出来る訳が、ない、でしょ」

声が上ずってしまった。

「だって治癒の時は結局手を当てて相手のプラナを調整するんだよね。視えなくても出来るんじゃない？」

「また思いつきでそんなことをっ」

と言いつつも、手を通じてマークのプラナを感じてみる。

――なにも感じないなぁ。

マークの手のぬくもりが伝わるだけだ。自分でも気づかないうちに冷えていたらしい。温もりがありがたい。

温まった手のひらのプラナに集中して活性化をさせてみて、もう一度マークの手からプラナを感じようとする。

「あっ」

今度の叫びは歓喜の叫びだった。

「うん感じる。これ、マークのプラナだと思う」

「今は僕のプラナを活性化させてるからね。普通の人のプラナより感じやすいはず。じゃぁ活性化を解くよ」

途端にプラナを感じられなくなった。

「なんだぁ。マークが活性化した時じゃないと感じられないんじゃ、あなたにしか使えないじゃないの」

――得られた歓喜が大きかった反動で、がっかりする。

「でも、練習を続ければ、普通のプラナも感じられるようになるよ、きっと」

「そうよね、もっと練習して、私のプラナを強くすれば私にも治癒魔術が使えるようになるかも」

――うん。今までよりずっと前進してる。

「僕がこれくらい使えるようになるまで7～8年はかかってるから、この先長いけど頑張ってね」

マークは期待させて落とすのが趣味なのだろうか…

「お嬢様ぁ、あ、きゃっ」

突然、庭の反対から声がした。メイドのミラさんだ。今日は朝早くから来てもらったのか。朝早いからか、なんだか顔が赤いようだ。

「あの、お客様、お嬢様。おはようございますっ。お二人で仲良くお話していらっしゃるところ、も、申し訳ありませんが、朝ごはんのご用意ができていますっ」

どもってる様子がなんだかおかしい。ふと彼女の視線の先をみると、そういえばまだ手をつないだままだった。庭の片隅で、二人で真剣な顔をして語り合ってる様子は、はたから見ると、少年少女の恋愛模様に見えたのかもしれない。

慌てるのも不躾なので、ゆっくりと手を放し、ミラさんに微笑んで言った。

「ありがとう、ミラさん。お客様と一緒にすぐ参りますわ。マーク様、ご一緒にいかがですか？」

――うん、平静な声だったよね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9438x/

肝っ玉お嬢様奮闘記

2011年12月19日18時46分発行